
焼肉定食は時に弱肉強食をも凌駕する

妄想少年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

焼肉定食は時に弱肉強食をも凌駕する

【Nコード】

N4756F

【作者名】

妄想少年

【あらすじ】

この物語は朝比奈薫ことブラコンこと凡人ヒロがなんやかんやで世界と弟を守るために扮装するお話である。

第一話：女の敵

敵って誰だったっけ？

そんな事をフト思った。

敵というのは敵以外の何者でもなくつまるところ、味方では無い誰かである。

そんな誰かを忘れてしまったのは失敗だったかなあ。

朝比奈 薫はそんな事を考えながら帰路についていると駅前の大きな交差点で薫は敵を発見した。

二ツト帽に赤いヘッドフォンを付けて彼は正しく敵だなと薫は決定づける。

正しくは勘なんだが彼女の勘は良く当る。

正しく彼が敵だからだ。

あの今時なシルバーと古着を身に纏った男は敵である。

ただ、何の敵かという概念は判らない。

敵である。

そんな彼は大きく欠伸をしながら信号が青になるのを背中を丸めながらまっている。

先手を打てるかも知れない。

薫はそう思った。

目の前に敵が居るのならば初発で殴って、二発で倒して、三発でねじる。

それが正義の味方たる正義の味方である所以。

正義の味方とは諸悪にして偽善たる者の事を指す言葉だが薫は仕方無くで正義の味方になった女子高生だ。

だから彼を倒すのは正義の味方であるが故にである。

大きく息を吸い込み吐き出す。

そうして信号が青になる瞬間を待った。

車道側の信号機が黄色から赤に変わり、そして交差点の信号が青

に変わった瞬間に薫は誰よりも先に飛び出した。

ホップ・ステップ・ジャンプの要領で大きく飛び跳ね、背中を思いつきり逸しながら右腕を引き、彼がこちらを向いた瞬間に薫の拳は彼の頬にねじ込まれてコンクリートの地面に叩き伏せられた。

周りの人間が一拍遅れて後ずさる。

どうやら彼は敵ではあったが大きい敵では無かったようだ。

多分、他者の敵とか仲間の敵とかネットの敵とかそんなだろう。興味がないから薫はそう思う事にする。

思う事は意外に簡単な事なんだなあと薫は結論付けた後に肩にかけていた紺色の鞆を持ち直して何でもない風に帰路につく。

それが彼女の日常である。

『焼肉定食は時に弱肉強食をも凌駕する』

「ただいまあー」

さして広くない玄関で帰ってきた事を知らせる為に大声で帰宅を知らせる。

こうする事により主の帰宅を促しているのだが、今回は珍しく玄関先まで迎えにきてはくれなかった。

少しだけ薫はむくれてドスツドスツと大男が歩くような足音を立てて廊下を進む。

どうやら出迎えてくれる筈の主は夕食の準備をしながら洗い物と洗濯をして、尚かつ得意のジグソーパズルをしている最中らしい。

風鈴か火山か？と意味の判らない暖簾をくぐると真剣な表情をしたバラバラが台所にある四人掛けの椅子に腰掛けてなにやら悩んでいた。

長袖の腕部分が1・2倍ほどある服を着たバラバラは古着の寄せ

集めを縫い合わせた服を着て、ダメージ加工されたジーパンとニットとキャップを足したような帽子を被りながら真剣に、時に悩みながらジグソーパズルを解いている。

その横顔はみていて大変おもしろいのだが、やはり薫としてはおもしろくなく、むすうと薫は頬を膨らませたまま仁王立ちして気づくのをまっっている。

ジグソーパズルにかまけて通い妻兼姉である薫を無視するからこうなる。

正直な話。

極度のブラコン意外の何者でもない。

「た・だ・い・ま・！」

ビクツとバラバラは肩を震わせて椅子ごとあとづさる。

どうにもこうにも無視される事に耐えられなかったらしい。

「お、おかえり。姉さん帰って来てたんなら一言掛けてくれれば良かったのに」

バラバラはそう言うのとジグソーパズルをリビングの奥にある和室に持って行って家事を再開する。

「ただいまって言いましたあ。でもバラバラが気付いてくれませんでしたあ。だからお姉さんは気が立っています。どうにかしてくださいー」

薫はむくれっ面のまま肩にかけていた紺色の学生靴をポイツと和室の方に放り投げて木造の椅子に座る。

「そんな事言っただって……姉さんがこんなに早く帰って来るとは思わなくて。でもでちゃん昨日言われた通り洗濯物は回したし、布団は干したし、晩ご飯ももうすぐ出来るから」

バラバラは愛想笑いで薫と距離を測りながら台所へと立つ。

「そんなの当たり前でしょ。あんたは私の弟なんだから」

薫はそう言って舐め回すようにバラバラを見る。

やはり弟にして良かったと思う。

痩せてもいないが太ってもいないあの体に、女の子のような真っ

白い肌。髪はサラサラなんだけど二か月前の事があって今は帽子を被っている。

ふとその帽子の脇から緑色の髪が見えた。

「やはり治らないか……」

独り言のつもりだったのだがどうやらバラバラに聞こえていたみたいだ。

「まだ二か月だからね」

バラバラは愛想笑いで誤魔化す。

ただやはり薫としてはおもしろくない。二ヶ月となら変わっていないから大丈夫だよって言われているような感覚がして、少しだけ滅入る。

「まあ大丈夫よ。流石に世界の敵とかなったら私としては困るけれど、あの時はまだ『故に敵』って感じだったんだから」

「故に敵なんて上手い事言うね。故に敵かあ。確かにそうだったね」「だからまだいいのよ。故にぐらいはまだ。ただ『世界の敵』とか『人類の敵』とか『真理の敵』とか『ただの敵』とかだったら、敵意外の何者でも無いから殴って治らないから殺すしか無かったかも知れないけれど」

淡々と薫はそう言って欠伸を噛み殺す。

「つまる所私が何を言いたいのかと言えばっ！！」

「言えば？」

「抱き締めて」

あ。バラバラが止まった。

「ね。姉さん何を考えているんだよ。僕たちはまだ青少年で姉さんだって初めてで、僕だって初めてで、それにシャワーとか浴びなきゃならないし、ついでに服も着替えなきゃならないし、しかも姉弟だからそんな事はだし、まだ夕方だし……」

とんでもない想像をしているんだろうなあと薫は思いながら耳まで赤くなったバラバラを右手で引っ張って自分の胸の谷間に押し込んだ。

「何て想像してんのよアンタは……自分の弟を食べちゃっつ訳無いでしょ。ただのスキンシップよスキンシップ」

バラバラは服の裾をギュッと掴んで石像のように動かない。たまには動く石像ぐらいになっつてくれてもいいと思う。

家の外では鴉がカアカアと間抜けといわんばかりに鳴いていて、夕日が西へと落ちていく。

ブクブクとビーフシチューが鍋の中で音を立ててなっつているが気にしない。

この十分間だけは敵だろうが味方だろうが無視して私の時間だ。どうせ……私に安息は無いのだから。

夕食を食べ終えて就寝時刻の午後9時丁度に薫は身支度を整える。憂鬱だと薫は思うがそれが宿命と言われたら仕方無いのかも知れない。

服を着替えながら相変わらず汚い部屋だと思う。

例えるならば玩具箱ひっくり返したような感じだ。

何がどこにあるのかすら判らない。雑誌やら服やらなんやらでどうやって散らかしたのかすら覚えていない。

バラバラには一応部屋には入らないようにと言付けてはいるが、服やら下着やらが消えて次の日には干されている辺り流石は私の弟である。

ふうと溜め息を吐いて、脱いだ筈の学生服にまた身を包む。

一番始めに敵と対峙してからすっかり戦闘服となっつてしまった。

スカーフをセットした後は私は部屋を出て、目の前にあるバラバラの部屋の扉を開けた。

何とも幸せそうに眠っている。

小さな寝息を立てて、ぐーすかと眠っている辺りまだ子供だなと思う。

カチツと何処かで音が鳴った。
それは薫しか聞こえない音だが、彼女はそこで非現実を現実にする。

『目に映る者全て敵』

その条件化だからこそ、薫はヒーローで正義の味方で愚者である。昔、目に映る困ってる人間を助けたいと思った青年が居た。それは正義の味方だけれど矛盾したやり方。薫はそう思いながらマウスをクリックしていた。だけどその意見は限り無く真理に近い場所だなと思った。だから彼女はその世界で一番冴えないやり方を薫は自己流にアレンジしてこね練り回して薫が薫であるが故の結論と戦う理由が見つかった。

そもそも戦いなど薫は嫌いなのだ。
ただ弟が出来てしまった以上は弟を助けなきゃならない。
しかもそれが敵であろうと弟は助けなきゃ姉では無い。
姉とは年下を抱き締めて可愛がって助けるものだ。
だからこそ薫は弟以外ならば全員敵だと認識する。
それが彼女の世界で一番冴えないやり方。

「らあああああああああ!!!!!!!!!!!!」

巻き舌を意図もしないでいきなり地面を殴り付ける。
RPGの世界なのに何故かコンクリートの破片が宙に舞う。
ニヤリと薫は笑って明らかに楽しそうな笑みを浮かべて次々と地面を殴る。

破片破片破片破片破片。

薫の手は血で真っ赤になっている。
当たり前だ。

コンクリートを何度も壊していたら血が出るのも当たり前。
彼女はただの一般的なヒーローで武器など何一つ持っていない。

剣も無ければ、鎧も無い。
銃など銃刀法で掴まるし、特殊能力などからつきしだ。
だから彼女は唯一誰もが持っている技能を使う。
やせ我慢と努力と忍耐のみ。
それ以外、何一つ持つちやいない。
そりゃヒーローとしての称号を貰えたのだから、人並み以上にはある。

コンクリート壊す程度ならば。
ただそれ以外は何も無い。

つまりは薫は一般人以上でしか無い。
才能が有ったり、センスが良かったり、死の線見えたり、魔術回路持っていたり、戯言とか抜かす餓鬼より、全然下だ。
そんな人間が弟を守る為にとった行動は努力のみ。

だから彼女は努力した。
女の子なのに体脂肪率6.2だ。
だからペチャパイとか言われるけど薫は気にしない。
特化する技能が無かったら特化させる筈の技能を特化すればいいだけの事。

だから彼女は努力という技能を最大限まであげた。
一日二時間寝れたらいいほうだ。
超回復だろうが何だろうが腱がきれるまで動きまくった結果がこれだ。

だから彼女は凡人ヒトと言われる。
ただ特化したのは努力のみ。
だからこそ、彼女は負けないのだけけど。
ザッツとRPGの画面にノイズが入る。
当たたと薫は思った。

拳が当たらなければ別の方法で当てればいいとそんな単純思考の発想だったが、自分もダメージを受ける事を計算に入れて無かったらしく、彼女はあ……と溜め息を吐いた。

「意外に痛い」

それ以外の声は出なかったがそれでもまだ声は出るんだなと薫は思う。

どうしようも無いほどの痛さは尋常じゃないほど痛い。

心がつぶれてしまふんじゃないかって思うほど痛い。その痛さを知っているからこそ薫は首をコキツと鳴らしてまたもやコンクリートに向かう。

『ソナナコトヲ、シテムムダダトオモイマセンカ?』

白いアイコンが浮かんで薫の敵である彼はいう。

「無駄かどうかは私が決める。あと言つてなかったけ? 私に意見して良いのはバラバラかエンコ-する親父が偽善者だけだ」

何処にいるか判らない人間に微笑んで薫は言う。

「それ以外は敵なんだよ。悪いけどね」

薫は思考する。

勝つ方法を思考するが敵に自分の居場所を教える馬鹿もいないだろうし、その前にこの空間をどうにかしないといけないんだけど何か方法無いかたとコンクリートを破壊しながら思う。

でもやはりこれ以外の方法は思いつかない。

ただ、その前に私が出血多量で負けてしまふかもしれない。

そんな事を思いながらフツと何故RPGの世界なのだろうと思いつく。

そもそも私を八つ裂きにするならばこんな空間でもいいのではないかなと思いつく。

なぜRPGなのだろう?

むーっと考えて居ると手が止まってしまった。

だけとおかしい。攻撃が来ない。

そもそも敵は攻撃してきたらどうか? いやいやおかしくないか? そもそも攻撃をしないのはおかしくないか?

薫は少し考えてから『うん』と何故かうなずいて、頭を掻いた。

「あのさ……あんたつてさ。隠れオタクでしょ?」

バコンッ！とした鈍い音が鳴り響き、女の敵である彼はコンクリートの地面に沈む。

脳天から顔面落下はさぞかし痛いだろうなって思いながら薫は振り切った手首をぶんぶんと振り回しながら思う。

「まあ今回は私の勝ちだね」

にこやかに薫は笑ってそういった。

この物語は朝比奈 薫ことブラコンこと凡人ヒトがなんやかんやで世界と弟を守るために扮装するお話である。

……………多分ね。

第二話：穀の敵

ずっと思っていた事がある。

寿命を全うした人間はいつたい何処に行くのだろうと考えていた。死んでみないと判らないのは知っているけれど、意識は何処に消え、意志はどこにいつてしまふのだろうとその事ばかり考えていた。死にかけて祖母や祖父に聞いてみた事はあったが、彼らはニコニコと笑っていただけだった。

一応、悟りというものを得れば結果が出るという噂を聞き、宗教にも手を出してみたが何も得られる物は無かった。

ただ色々な物は知れたような気はした。それと同じくして死後の話や語り継がれている事は生きている人間が考えた後付けでしか無いのだと結論も出た。

そんな事はかりしていると自分は死んでから何処に行くのかという事よりも、自分が自分の意志であるのかどうかを疑い始めた。

自分という確証は何処に行つたって何も無いというのに何の根拠があつて自分という物に確証を持てるのかと考えてた。

役所に行つて聞いてみたりもしたが、渡されたのは戸籍だけだった。

ただそれが正確であるかどうか定かでは無いものを渡されても確信や証明を得る事が出来なかった。

一度寝た女が『アンタの子だ』というような不規則で信じがたい物だとこのとき思った。

DNA鑑定するわけじゃないのだから、女に貴方の子だと言われたら信じるしかない。

こんなものなのだろう世界というガラス玉は。曖昧であやふやなこの世界で信じる物はというとやはり自分の自我や意識でしかないのだと悟った。

ならば自分が死ぬと意志が何処に行くの判るかも知れないと、手

首を切り裂いてみた。

気がついたら病院のベットの上において父親であろう男に殴られ、母親なのだろう女は一晚泣いた。

どうやら生き延びてしまったらしいのだ。困った。

入院中に精神病棟にまで入れられて、白衣の男の質問に答えているとあげくにベットに拘束までされた。

仕方ないので舌をかみ切ろうとしたら次の日には猿ぐつわをかまされて何も出来なくなった。

そこから四季が2回程変わったある日に思い立った。

人を殺せば判るかもしれないと思い立った。それは完璧な作戦だと思われた。

自分が死ねないのだから他人を殺せば判るかも知れないと思った。手始めにポールペンで白衣の男を殺してみた。

意外に呆気なく死んだ。

ただ、骨は硬く、肉はピンク色をして、脂肪は白くて、血は赤ではなく赤黒いのだなと知識だけは得れたような感じがした。

しかし、同時に死ぬ間際に意識はどこに行きそう？ という質問を投げかける事は出来なかった。その前にあっけなく死んでしまった。

仕方ないので病院にいる人間という人間を殺してみた。

呆気なく死んでしまって意識が何処に行くのかやはり教えてもらえなかった。

仕方ないので病院をでて教えてくれそうな人間を捜し回った。

雨が降っていた。少しだけ肌寒いと思った。

……………感想はそれぐらい。

第二話
『殻ノ敵』

起きてすぐに薫は自分が何処に居るのかを確認する。

それはどうあっても自分がどこで目覚めたのかを確認する事と、この世界に居るのかどうかという認識の為。

平行世界の可能性すら疑う。

疑わなければ足元がハッキリしない。

そうしなければ自分が立っているのか、座っているのかすらも判らなくなる。

拳を見ると昨日あれだけ血を流したというのにもかかわらず、両手は綺麗に回復していて、毎度の事ではあるが自分の醜さにゾツとした。

怪物みたいだと心にも無い事を思う。いや実際は自分ではない誰かに言われてるような気がして、酷く陰鬱になる。

『ヒーローなんてものはろくなもんじゃない』

そういえば、誰だったかそういう事を言っていた気がする。

それはヒーローなのか、ヒーローにあこがれる人間だったのか、それとも仇なす者だったのかは定かでは無いがそう言っていたような気がする。

誰だったか？ …………… 頭が悪いというのは時にいやになるな。と結論付けた。

自分が何処に居るのかを確認して、薫は半身を起こす。

肩寸まで揃えられた黒髪が肌にくっついて、タンクトップも肌に

張付く。寝汗が体中からかいている事に今気づいた。

「起き……ます」

誰とも無く呟く。

起きるといっのはつまり、そういう事。

脳をいち早く覚醒させて、いち早く自分を世界に認識させる。

灯台のような物。自分は此処に居る。だから早く私を狙えという

合図。

頭の隅に今もあるifという夢の世界を追いやるタメでもある。

そこには悲しいくらいに夢と希望が詰まっっていてアンパンマンすらその世界の住人であるぐらいのメルヘンで楽しくて平和で幸せだ。

だけどかえって来ると途方もなく大きなカナシミが薫をおそうのだ。

だから、深く眠るのは好きじゃない。誰だってあの世界じゃ無防備だ。躲す術もないし、そこに救いもない。

タンクトップと下着姿で立ち上がり、学生服に着替える。

壁にかけてあるスツール製のハンガー掛けから学生服をひったくり、ノロノロと薫は着替え始める。

タンクトップを脱いで、下着を替え、ワイシャツを着て、スカートのジッパーを上げ、スカーフを締めた。

手順通り、間違いは何も無い。というか間違えようがない。

なのに着替えが終わった瞬間に薫はゆっくりと、溜め息を吐いた。部屋が寒いのかどうかは知らないが、吐き出した息がキラキラと白く光る。

何時もの淡々とした作業。

嫌いでは無いけれど、好きにはなれない作業。

フト外を見ると、遮光カーテンの隙間から透明な線が見えた。

「……………今日はやっぱり雨、か」
呟いた。が雨音にかき消されて音は静かに暗闇の中へ吸い込まれていった。

雨と飴は両方嫌いだった。

部屋から出ると、鮭の香ばしい匂いが台所から漂ってきた。

部屋の前で薫は大きく伸びをした後に、ゆつくりと台所へと足を運ぶ。

「あ、姉さん起きた？」

バラバラが似合わない向日葵柄のエプロンをして、笑って薫を迎える。

菜箸であれこれしている姿は何とも主夫というか、主弟？ そのものである。

「相変わらず。何か家庭的だね。バラバラ」

椅子に座り、決められた事をするロボットのようにはテレビを付ける。色白で唇がぷっくりとしたお天気お姉さんが愛想笑いで微笑んでいて、その度にいつも、ひがみとかいじめとか沢山あるんだろうなあとか薫は思う。そもそも僻みとか妬みとか出来が良く生まれた人間にはどうしようも無いのになぜ、そこからいじめが起きるんだろう？ やっぱりもてるからかな？

「なんか今日は調子悪そうだね」

バラバラに話しかけられて思考を止める。どうせ考えても仕方ない事だ。そんな事考えるならばどうやってバラバラがなぜ巨乳好きなのか？ という事を考えた方がましだ。

やはり脂肪かッ！ あの脂肪の塊がいいのかッ！

「ん？ ーなんか調子出ない。つか御飯の匂いが何か気持ち悪い」
テーブルの上のミカンを取って皮を向く。毎度この白い糸みたい

なの外す人いるよね。あれってやっぱり几帳面とかなのかな？　つか私は誰に向かって話してんだろう？

「そりゃ二か月前まで姉さんは朝御飯食べる習慣が無かったもんね」
バラバラは笑いながら鮭の脂身をひっくり返して、薫を揶揄する。
その手さばきに少し感動を覚える。

「だって……何かダルいんだもん。朝食食べるとか」

机に両手を伸ばしてナメケモノのように机に倒れる。

多分ナメケモノというより生ものだよ。女の子って。

早めにお召し上がり下さいみたいなの？　でも食べてくれなきゃ腐る訳でも無いのに何でそんなに……ねえ？

「だってじゃないよー。そんなんだから姉さんは低血圧なんだよ。もうちょつと栄養の付く物食べなきゃ。あ、姉さん暇ならテーブルの塩取ってくれないかな？」

薫はムツと顔を上げると、テーブルから右手を水平に移動させてガスコンロの前に立つバラバラに手渡す。

「ん」

「ありがとう。……本当に調子悪そうだね」

バラバラが苦笑とも失笑ともつかない笑みを浮かべて、鮭をひっくり返す。

意外にも耳を澄ますと換気扇の音も聞こえるだたと薫はなんともなしに思っていた。

「昨日は少し血を出し過ぎた」

顔を伏せながらバラバラに伝える。

「それ平気なの？」

「……………平気じゃない」

嘘だけ。

薫がそう言えばバラバラは確実に心配してくれると判っているからだ。

「今日は休む？」

鮭が焼けたのか、昨日の夕食の残りである玉子焼きを小さな皿に乗せて、テーブルに置いていく。

どう見てもこの身のこなしは主婦だよなぁとか思いながら薫はくたびれたまま考える。

「いいよ。そこまで心配しなくても。バラバラが一日中添い寝してくれるっていうなら考えるけどさ」

バラバラが茶碗に白米を盛りながら、テーブルに並べていく。

「そ、それはちょっと」

「ふんだ。言うと思ったたよーだ。バラバラなんか嫌いだッ。嘘だけど」

「逆だけど。」

じゃあ本当の気持ちはどっちなんだろう？ 反対の反対？ 反対だから反対？ それとも『嘘だけど』も反対？

じゃあ本当の気持ちは本人にしか分からないんだよな。

それを相手に伝えようとか思うのは愚かではないよね。まあ気持ちには分かるけどさ。

バラバラは薫の対面の椅子に座って微笑む。

「まあ食べようよ。あと嘘だけどって言葉はあまり使わない方がいいよ？ 何でもアリになっちゃってしまっよ」

「逆だけど……」

「意味合いは一緒だよ。そんな言葉全てがギミックになってしまっよ。そうなれば言葉は言葉じゃなくなっちゃってしまっよ」

「難しい事言うわね」

「僕がそう思うだけだけどね」

ある意味ジャンルを否定したなぁとか思うのだけれど、それはバラバラの持論だから仕方無いか。

戯言だけど。

そう言えばこの言葉を使うと全ての小説が戯言ジャンルみたいになるけど、そこに拘ったら先にいけないよね。

あとそろそろ『スタンド』って言葉は国語辞典に載ってもいいと

思う。

「URYYYYYY!!!」

「ちよ。姉さんどうしたのいきなりっ!」

「いきなり高貴なるお方が私の中に入ってきたのよ」

「姉さん。それは多分妄想だよっ!」

「妄想だろうが空想だろうが神様だつて殺してみせる」

「間違えてる姉さんっ!　そもそもナイフ一本で神様殺せる人間と張り合っちゃ駄目だよ!」

「悪いな。こつから先は一方通行だ」

「完全記憶能力とかないからっ!　何か趣旨変わっちゃうからっ!

そもそも姉弟コンセプトじゃないから!」

「まあそんな話は置いといて」

「好き放題し過ぎだよ姉さん」

「色々と女だつて堪ったり溜まったりするのよ」

「姉さん朝から卑猥過ぎるよっ!」

朝から無駄にバラバラをからかう。

無駄という行為は本当に無駄だけれど、無駄な思い出ほど記憶にはこびりついていて、それが数年経つと懐かしいと感じるのだ。

そんな当たり前を当たり前だと感じる事が大切なのだ。

それは薫が一番良く判っていた。

それこそ痛いくらいに。

朝ご飯を食べ終わり、ふうと一息吐く。

外を見ると相変わらずの曇り空で、透明な雨が降り続けている。

タタタタンとリズムを刻むように雨音がコンクリートを叩いていて、今流行のJポップなどよりかは遙かにリズムがいい。変則的で単調だ。

テレビに映る可愛い天気予報士が小学生のような黄色い傘を差しながら明日までこの天気は続くであろうと予報している。予想なのかもしれないけれど。でも所詮は確率の問題でしかないのに何を予報するんだろうか?

「……鬱陶しいね。雨」

呟くとバラバラが渋めの緑茶を呑みながら外を見る。

「姉さん。相変わらず雨嫌いだね」

「バラバラは好き？ 雨」

「僕は結構好きだけどね。洗濯物が干せないのが厄介だけど」

「変わってるわねー」

テーブルに頬をくつつけてそういう。

集点すら合わない目で外を見てもボヤケて何も見えないのだけれど、とりあえずはそこに視線をやる。

いや、何処を見たって今の心境じゃ何も見えてはいないのだけれど。

二人して外を見ていると、テレビが星占いを映し始めた。

「さ。姉さん行かなきゃ。もう時間だ」

バラバラが薰の鞆の中に弁当と折り畳み傘を入れてくれる。

占いのカンドダウンはちやくちやくと進み。最下位を映す。

「ごめんなさい。今日の最下位は獅子座の貴方。ついてない一日。

何をしたりマイナスで誰も貴方のがんばりを認めてくれないかも」

今日はのっけから憂鬱だなあと薰は思う、鞆と傘を持って家を出た。

長い一日の始まりだった。

2

敵だろつなと薰は思った。同時に敵じゃなければいいなとも思った。

矛盾した思考だなあと薰は考えて、視界を覆っている傘を斜め上

にあげた。

そうすると茶色一色だった眼前が開けて、猫の死骸を片手に持った少女と目が合った。

バラバラと同じような歳の少女で、綺麗に肩幅に揃えられた黒い髪が印象的な女だった。

長袖のワンピースが良く似合っていた。

ただ、目に宿した光の無い瞳は焦点を捉えず、何処も見ては居なかった。

嫌な目だと薫は思う。

光を宿さないという事は何も見えちゃいないし、見ようもしない目だ。

そこに光があるのに見ようとせせず、内側から鍵を掛けた人間の目だ。

そんな瞳をもつ人間を一人だけみたことがある。丁度二年前に。鏡の前で。

「今から学校かな？」

長袖のワンピースを着た少女は色白の肌と共にニツコリと笑み、薫に問いかける。

初対面の人間にしては凄く根性が座つてると思うが、目の前の人間は間違なく敵であり、敵意外の何者でも無かった。

何故判るのかと言われたらそうとしか思えないからだ。

そもそも、初対面の人間に今から学校かな？ などと質問しないのが世の中の道理だ。

そんなもの今から貴方と関わりますという前置きみたいな物だ、「うん。ただ何というかこのまま見逃してくれる気はないかな？

朝からこういう濃いのは私としては何かヤダ」

逆手に持ったナイフが先ほどまで居た位置に振り切られた。

「ちよ。ちよい待った！ あんたが敵なのは理解してるけど、あんたと闘う理由なんて無いんだって！ そもそも私は自分が守れる人間さえ守れたらそれでいいの。あんたと敵対するつもりなんてない

って」

女はキョトンとした目をしたと思うとナイフをしまう。

「敵？ 敵とは何でしょう？ あらたな疑問です。RPGとかの敵ですか？」

意識が剥離されてない……？

大体敵と言えば何処かしら意識を深層意識に身を委ねる物なのだが、なんでこんなにハッキリしているのだろうと薫は思う。

「あんた……何とも無い訳？」

「何とも無いとは？ 私はただ意識が何処に行くのかという積年の疑問を解消しようと人を殺してるだけですが？」

「いや。それはおかしいだろう。どう考えても。道徳的に」

「知識欲の乾きを潤すことがそんなにおかしい事だと思います？ 私はそうは思いませんが」

「あんたつてさ。あれ？ 天然つて奴？」

いや天然で人殺してた天然というより天才だわ。

「天然つて何ですか？」

「それすらも判らないんだッ！」

「ああ。判りました！ 天然水とかがつてやつですね！」

大きな瞳をまたも大きく開いて彼女は両手を合わせて答える。

「いやーそこまでいつたらあんたは間違い無く天然だわ」

しかも少し可愛いというのが悔しい。なんだこのフランス人形みたいな小さな顔は！ 皮肉かッ！ しかも天然つてど真ん中ストライクかッ！

「いやーいるもんだね。神様の芸術作品つてやつ。なんか私人間辞めたくなってきたわ」

「じゃあ死にます？」

「いやいや怖いから！ ものすつごい怖いから！」

「怖くしませんから」

「笑顔ですり足すんなッ！ そつちのほが怖いわ！ つか狙うんなら別の頭悪そうな学生とか狙えばいいじゃん。なんで私なわけ？」

「頭悪そうな女子高生でしたから……」

そうか……軽くシヨックだ。私って今時の頭悪い子に見えるのか

……

「まあ落ち着いて私の話を聞いて人殺すの辞めようとか思ったりしない？ いやむしろ私をこのまま逃がす気ない？」

「ありません」

笑顔でいう彼女は何も言わずにナイフを振り上げて薫を襲う。

どうしようもないかあ……

だからハツキリと薫は言う。

「OK。了解。わかった。じゃあ今から私は貴方の敵で貴方は私の敵だと認識する。いっとくけど手加減できないからね」

貴方の敵は私だと言う。

彼女はゆっくりと笑うと、少しだけ小さな首を傾げて妖艶に笑う。

「敵……ですか？ わかりました。そういう決まりならば私は魔物役になりました。ただ私としては敵の概念をしりたいのですが？ 何故私ができるのでしょうか？ そもそも敵っていう概念は正義がいるはずなのに今この状況はどちらにも正義じゃないですか？ いやあ私はどちらの敵なのでしょう？ そもそも貴方は自分が敵だとは考えた事は無いんですか？」

そんな事を言われても薫は眉一つ動かさない。

薫にとって自分が敵だろうが味方だろうがどちらでもいいのだ。

弟であるバラバラさえ助かれればそれで良い。たとえそれが世界を壊す選択だったとしても後悔しなければそれでいい。薫にとって世界とはただの器にしか過ぎず、それ以上の価値もそれ以下の価値も平等にない。

助けるという概念が違う。助けたいって思いが違う。助けようって思える持論が違う。

世界を助けるなど言えるやつは、それなりの力が持ってる奴が言えればいい。この世界に助けるだけの価値があるの“なら”の話だけだ。

「私はアンタの敵。アンタは私の敵でいいじゃん。シンプルイズベスト。それ以外になにを考えるとどうなの？」

敵である少女は『確か』にと頷く。

「では早速で悪いのですがお願いがあるのです。私の代わりに見てきてもらえませんか？ 意識が何処にいくのか……」

ガリツと薫の耳元で音がした。

「え？」

振り向く瞬間すら無い。

右耳から左耳に何か突き抜ける。

同時にその音は脳をかき回し、視覚と聴覚をいきなり失った。

そのまま腰から空気が抜けるように力が入らなくなり、立てなくなった。

足に力が入らないどころか焦点が合わない。自分はなぜにこうも間抜けに腰を抜かしているのだろうと考える。

先ほどまで筋肉でなりたっていた足がビクッビクッと痙攣して、頭も攪拌されてなにが起こってるのかすら把握できない。脳をぐらぐらと揺らされただけでこうも人間脆いものだとは初めて感じた。「フフ。ほら聞こえますか？ 私が崩れていく音が聞こえますか？ 私は脆く崩れていく音が聞こえますか？ 私は崩れていく。私は崩れるんです。脆く淡い人魚姫のように崩れていく」

薫を見ようともしない彼女は灰色に満ちた空を見上げて両手を広げる。

気持ちが悪い。

薫はその風景を一言で片付ける。見ていて気味が悪い。

いや、胸糞が悪い。

そんじょそこらの悲劇のヒロインとはまた違う感覚。

奴はカラッポなのだ。

カラッポである筈なのに、その表面に張付く感情とも呼べない代物は何なのだろうかと思考する。ころころと変わる表情はまるでお面のようなものだなんて思った。

ただ奴はカラッポだと自覚して尚、その生き様を『しょうがない』の一言で片付けれる奴なのだろう。

薫の全身に鳥肌が立つ。

こりゃヤバい。こいつはもしかしたら敵っていう概念じゃ最強だ。無自覚なのかそれとも無干渉なのか。

奴には世界の概念が無いのだ。いや常識が通用しないのだ。それに準ずる何かも彼女は持ち合わせてはいない。

主体性が無い訳でもなく、人間という意志があるのにも関わらず彼女はそういうものに対して無関心なのだ。

こりゃ負けるかもしれないなあ。

フラフラとまだハッキリと動かない頭を再起動させて立ち上がる。正確には立ち上がってると思う。

足に力が入ってるのか入って無いのかすら判らないのだから視覚で見るしか無いのだが、その視覚すらぼやけて高低差が見えない。立っていると思うしか無い。

一歩目を大きく地面を蹴り上げて。二歩目で大きく体を反らした。「糞ガキ。歯あ食いしばれえ」

着地と同時に大きく振りかぶった右手を相手の左頬に打ち下ろす。骨が碎ける音と共に小さな体躯の彼女が軒並み家を連ねている高級住宅の壁まで吹き飛ぶ。

確実に致命傷だがそれでも、薫は追い打ちをかける。

残心という言葉がある。

折りえても 心ゆるすな 山桜 さそう嵐の 吹きもこそすれと
いう道歌が有名だが、武道、芸道に関わった人間ならば誰もが聞く言葉である。闘っても勝ったと理解してもそれども尚、その気概を失わず再攻撃があった場合に備えて体を構える姿勢である。

ただその行動は武道や芸道という世界の話だけ。

いくらその気概があろうとも、もう一度攻撃された場合、負けるかもしれないのだ。そうなってしまうえば間抜け以外の何物でも無い。どどめを刺す事にためらいを持つ奴はヒーローでも何でもない。

ただの負け犬だ。

「ああああああああああああああああああああ」

その事を一番よく知っているのが薫だ。

死ぬ事を恐れれば死ぬ。とどめを刺さなければ刺される。意識が無くならなければいつか倒れるのはこちらだ。

ヒーローの世界など甘い物ではない。皆平等などで世界が平和な戦争など起きないのだ。正義が居るから悪が居るのだ。

ザビエルが愛を語ったところで現在は米軍が日本人をレイプするのだ。

その存在が居るから真逆の存在も居るのだ。世界はそうして出来ている。

今時の小説にある誰も死なない世界など、そんな世界は幻想ではない。幻想などとうに捨ててしまった。

敵である彼女の髪を掴んでコンクリートの壁にぶち当てる。鎌首もたげたように返ってくる顔面に膝をかまして、乱打。乱打、乱打。カクンと敵である彼女の首が折れて、そのまま水浸しのコンクリートの上に倒れた。

時間で20分やそこらで薫は敵である彼女を殺した。いや実際に死んでいるのかすら生きているのかすらは判断できない。

生きているかもしれないと薫は思う事にする。人を殺すのにためには無いが人を殺すのはやはり後味が悪い。

「しんど。何で私がこんな目に遭わなきゃならないんだろ。あーバラバラ。お姉ちゃんももう無理だよ。挫折しそうだよお」

ポケットから携帯を取り出して、119を押す。119であつてたかどつかは判らない。そもそも119って何番だっけ？

怒った顔のぬいぐるみが姿を現すが知ったこっちゃない。なにがウガーだ。似てないっつうの。

いまはとりあえず119だ。119って何番だったかあ。あ、119番じゃん。

「えーつと1、1」

それからまもなくして敵である彼女はおぼついた足取りで消えていった。

3

目を醒ますと真つ白な蛍光灯と、真つ白な天井が目に入った。

ここ何処だろう？ と薫は考えるが、考えても結果など出ない事は判りきっていたので寝た。

考えても判らない事は思考しても無駄である。

そこに例えば居場所特定検索エンジンだとか、マニュアルみたいなのがあれば話は別だけれど、考えて判らない事を何時間も考えるよりは聞いた方が早い。

今この状態がそうだ。

考えてみた所で自分が何処に居るのか？ 等をうだうだ考えてみた処でそんな事意味の無い事だ。

ならば体力を回復して、状況が判る奴に状況説明させればいい。

聞かれなかつたら問うだけの事。

ふてねしようとした時にヤケに身体がスースーするなあとか思っ
て睨をもう一度開けると意外なことに全裸だった。

びっくりするしない以前に脱がした張本人は間違なく血祭りに拳
げてやるうと心に決めた。

バラバラにすら見せた事無いのに……っ！

その身体を見ながら思う。

相変わらず胸囲という胸囲は無く、泣きそうになった。

世の中にはつるべた属性なるものや、貧乳属性などといういか
わしい属性があるのは知ってるが、バラバラは悲しい事に巨乳好き
なのだ。

何が悲しいって、下着タンスの裏にエロ本があつた事だ。しかも巨乳ッ！

あんな脂肪の塊など何がいいのか判らない。やはり挟むのがいいのか。

それともあの掌に収まらない感じがいいのかッ！
埋もれたいのかッ！

段々と腹が立っていく事に気がついたけれど……悲しい事にいくら怒った所でこの胸は大きくなるらないのだ。

………ツライ。

薫はゆっくりと溜め息を吐いた。

「巨乳とか死ねばいい」

「それはあれか？ ウチへの嫌がらせか？」

いきなり声をかけられて薫はベットから飛び退く。

「そない。いきり立ってもしょうないよ？ 薫」

長くストレートな黒髪。

櫛を梳けばそのまま落ちるぐらいの綺麗な髪だ。

作られたような線の細い顔に、色彩の淡い藍色の着物。 パツと

みた限りでは間違なく大和撫子を彷彿させる。

肩にかけてある白衣と手に持った銀色のキセルさえ無ければの話だが。

「識髪……？」

さらしを巻いて尚、そのたおやかな胸を揺らして、識髪は近くの壁にもたれたまま薫の方を向き綺麗な笑みを浮かべた。

「後遺症とかは無さそうやね。まあそれでもあんなけ頭ガンガンと揺さぶられてたら脳がシェイクしてもうて結構時間掛かるんやけど、流星は凡人ヒトって所かな」

銀色のキセルを啜えて識髪は笑う。

「助けてくれた……のか？」

「まさか。起きたばかりで寝ぼけとんちゃうか？ アンタとウチは味方でも無ければ敵でも無いんよ？ あまりに唐突なボケやさか

「い返せんかったやん」

上品な顔して相変わらず毒舌だなあと思う。

「識髪は火種を窓から捨てて、二三度キセルを振ってから袖口に直した。」

「アンタとは目的が一緒なだけや。あんたはバラバラを。ウチはアイツの中に飼うてる敵さんに興味があるだけや」識髪は言う。

「それを忘れてたらあかん。ただアンタがおらなバラバラの中の野郎が出てこんからね。手当てしただけの事や」

面白くなさそうに識髪はそう言って近くの椅子に腰掛ける。

「丁度今から一ヶ月前。」

目の前に居るこの人間と死に掛けの殴り合いをした事があった。

それからというものの識髪はこの学校に赴任してきて、保健室の主と化した。

「本名は不明。」

「判る事と言えば京美人で毒舌でバラバラの中の敵を追っているという事ぐらいだ。」

「あんたさあ。いい加減諦めたら？ 二ヶ月前に封印してからめっきり出てこないのに、どうしてそこまで『故に』に固執すんの？」

「故に？」

「ああ私が付けた名前『故に』ってシツクリこない？ 何か」

「言い得て妙やな。でも何時出て来るかが判らんからんさかい。次は躊躇い無く殺すで。でも今はそんな事どうでもええねん。アイツ誰や？ あのあぶない奴」

あぶないね。

「私にしてみればアンタの方があぶないが……それってどうなんだろう？」

そんな事を思いながらも、あのバラバラと同じ歳の少女を思い出す。危ないというよりも脆い感じがしていたのは確かだが、それにしたってあんな化物みたいな奴を腹の中で飼ってたら普通精神が壊れると思うのだけれど、彼女は正常だった……気持ち悪いぐらいに。

「さあ……なんなんでしょうね？ 私が聞きたい」
ベットに半身を起こして答える。

まだフラフラと頭が揺れるがこれぐらいならば大丈夫だろうと結論。極論かも知れないけれど。

「まあ私としてはどっちゃでもええんやけど。どう考えても上位クラス。下手すりゃ死ぬで？ あんた」

「いや正直、面倒ですけど、私ヒーローなんで。倒さなきゃ誰が倒すのかと」

「世界に何百と居るヒーローに何を期待しろって言うんよ。確かに希少価値と言えば希少価値やけどヒーローの中やったら下から数えて二番目やんか」

「ヒーローというのは決して『なりたくて』なれる物では無いが、『なる』と決めたらなれる物である。

その境界線が曖昧だ。

ヒーローというのは肩書きでは無く、凡人に与えられた凡庸にして平凡なる称号である。

誰かを救う。

ただそれだけに特化した人間。

救う物の対象としては何でもい。世界だろうが街だろうが人間だろうが猫だろうが何でもいい。

そうやって薫はバラバラに合う少し前にヒーローになった。

助けたのは……他でも無い小さなカエルだった。

醜くて井の中しかしらぬカエルを助けるために薫はヒーローになった。

一度目の死闘で死にかけて彼女はヒーローになった。

ただ、最初に殺した敵もカエルだっただけの話。

「あれや。確かに気にかけるんはしゃあないけども、バラバラの事があるさかい。でも深追いしたら死ぬで？」

「ヒーローが人を守れなくてなにがヒーローですか……………」

「人を守るだけがヒーローちゃうやろ？ 何を勘違いしとるんかし

らんけど。アンタはバラバラ守るだけでよかったんちゃうの？」

確かに薫はバラバラを守るだけでよかった。世界など滅ばいいと今でも思ってるし、世界など守る価値もないと今でも思っているのは確かだ。ならばなぜ私はこんなにもあの子にこだわっているのだろうか？ と薫は考える。

ああ。そつかと理解する。どこかで見た事のある目をしていたんだ。誰だったか？ もう出会う事は出来ないけれど。そいつは確かに私の中にいたのだ。

大切なものが壊された時に私は私で無くなったのだ。

「守りたいと思う気持ちに理由は無いでしょ？」

「それで自分が死んだら身も蓋も無いと思うがな。誰かを助けたいなんてのは誰かを助けたいと思う奴が助けたらええんとちゃうか？ ヒーローやからって守る守られへんなんかの基準で話してもうたらまたあんたが敵になつてまうで？」

「そんなに救う価値がありませんか？ あの子は？」

識髪は袖から銀色のキセルを出して、中に葉っぱを入れる。

「無いな。私から見たらアイツは終わつとる。どうしようもなく末期や。あそこまで正常なんが信じられん」

「じゃあそつなんじゃないですか？ でも助けますよ。たとえ殺したとしても助けます」

「動機も理由も使命も無いのにか？ お前意味わからんわ。動くまでになにかしらあるやる？ そんなもんが無い人間に何を期待せえ言うねん。たかがヒーローの餓鬼に」

「復讐者風情に言われたくは無いわね」

「もういつペンいつてみ。かみ砕くぞ。餓鬼」

「どうぞ？ ご自由に？ アンタじゃ私は殺せないけどね。それでも助けにいけます」

識髪はキセルにマッチで火を付けると、一服して紫煙を吐き出した。

一瞬にして薫は髪を掴まれてベットに押し倒された。

「ええか？ 一回しか言わんからようきけ。アイツは上位クラスや。下手したら世界クラスかもしれん。ほんで末期や。ほっといても自滅するんや。あんた死んだら誰がバラバラの中からあの化けもんだすんや？ だれがバラバラ元にもどすんや？ お前やるいうたんちやうんか？ 世間知ってるかのような口ぶりで喋ってんちやうぞ餓鬼。いてこまずぞ」

背中にナイフの背が当てられている。さすがは復讐者。ヒーローのなり損ないだ。

「いいじゃん別に。バラバラは助けるんだから。それでもあの子も助けるんだ」

「アンタが死のうが死なまいがどちらでもかまわへんけど、アンタに懐いてるバラバラはどうするんよ？ バラバラはアンタの弟やろ？」

「アンタの弟でもあるけどね」

「せや。だからや。アンタはバラバラを守る権利があるやろ」

「誰かを選んで守るなんて行為をしなきゃならないタメにヒーローなんて称号貰ったわけじゃないわよ」

「はっ偉そうに。貧乳娘が」

「あつ……あつ……」

「まあバラバラは小さい時からお姉ちゃん胸しゅきーって言うてきたからなあ。今頃は巨乳好きで私みたいなこいう……大きな胸がやね」

「ふん。年増が……胸が大きければいいもんじゃないわよ！ ようは形な訳！ 判る？ こう形とか色とか右手に収まる大きさとか

……」

「まあ無いもんの言い訳やでな」

「うぎやー！！ お前殺す。今殺す。人がせつかくせつかく！！」

「巨乳体操とか夜な夜なやってんのにな。鏡見て両手を」

「それ以上いうなあああああああああああ」

大きく息を吸う。退屈な学校はすぐさまエスケープした。

実際には授業が終わるまで胸を……といえはいいか。あの後に識髪に羽交い締めにされた私は、胸という胸を揉まれて……思い出したくないから省略。

もみくちやにされて疲れ果てた私は保健室から出て行こうとする識髪から『丘上の豪邸』というキーワードを聞いて来てみたが、案の定、彼女が此処にいるという事が一目で分かった。

なにせ、惨殺だ。左右対称形形式シンメトリーに作られた庭園には色々な死体が転がっていた。

虫から人間までなんでもござれだ。何を思ったかあの子はどうしようもなく手遅れなのだと理解してその思考を飲み込んだ。

言われるより見て納得する方が結構ツライ事だなんてがらにもなく思ってしまった。

ゴックンと飲み干せたらカッコいいのかも知れないけれど、喉ごしは最低でいつも喉元で詰まる。

馬鹿みたいだ。私。

薫は死体の脇をすり抜けながら門前の大きな館を目指す。

あそこにまだ住んでるといふのだから、壊れてるよね……やっぱり。

何が彼女をそうさせたのかは判らないが、薫は思う。

人生は至って平凡な道など無いのだ。誰かしら何かしらの事情があつて、警官だったり官僚だったり殺人鬼だったりするのだ。

だから敵になる理由など誰しも持っていて、ヒーローになる理由だつて誰しも持っている。

ただ、彼女はその二つに一つの選択を薫とは真逆に行ってしまっただけの事。

溜め息はもう出なかった。

覚悟はとうに出来ている。

薫だつてヒーローのランクじゃ下から二番目だが、守るという一点に絞れば薫は誰にも負けない。

このポンコツで気味の悪い身体はその一点のみに特出し形成し強化し鍛えた肉体なのだから。

あるサウンドノベルを引用するならば薫の身体は

ただそれだけに特化した魔術回路。

ま、魔術とか関係ないんだけどねえー。おかわりアーサー王は出てこないし、エルフ耳の人妻出てこないし、黒い幼馴染みもないからねえ。

至つて面白みのない世界ですよ。

人の何倍はあるつかという玄関を開けると大理石の大きな階段があつた。

やはり周りは死体が大量に転がされていて、死体処理所とかつてオチは無いよなあとか思つてみるが、いかんせん日頃から妄想主義な癖して、こういう時だけ現実思考だ。

夢オチとかならばベストなんだけどなあと薫は思う。

正直、夢オチならば何でもアリじゃん？ つうか夢オチならばこんな現実見なくて済むじゃん？

ああマトリックスの世界に憧れるね私は。

この世界が空想ならばどれほど良いか。 そんな事絶対に有り得ないと判つていても少しくらい救いは欲しいじゃない。

死体を目の前にしてキヤーと叫ばない私も私か。 蘭を見習わなき

やならないなあ。事件毎にきゃーだもんなあ。いい加減慣れるよ…。
精神的にどこがおかしいのだろう。私と彼女である敵は。
結果などとうの昔にでている簡単だ。

人間だった者だ。

だからだろうなあと薫は思う。

だった。だつたなんだよな私もあの子もだつたなんだよね。
それを悲しいとは思わない。ツライとも思わない。

そうなる事を選んだのは他でもない自分だ。

ただただ少しだけ弱音を吐かしてもらえらんならば、寒いだけ。

孤独だと感じる事が何より寒くて寂しくて恐いのだ。
敵対する恐怖では無く。何も得られない恐怖。

欲しい物を壊してしまうこの身体では自分の幸せなど望んじやい
けないからだ。

それが寂しいのだ。

だから……彼女は救えないならば自分の手で殺すしか無いのだ。
刺し違えたとしても一人で行くよりはマシだと思う。

いや、嘘だ。

私自身が怖いのだ。

一人で居る恐怖が怖いのだ 壊れた人間がもつとも自分に近い存
在であるなどとヒーローとしては言語道断な意見なのだろうがそう
いう人間とそんな人間なのだからそれを恨むのならば神様にしてく
れ。

誰も一人で居る事の恐怖は知らないかも知れないけれど、一人
という孤独は並大抵の物じゃない。例えば寂しさのあまり人を監禁
したとしてもおかしくなくらいには。

何を考えているんだろうな。全く。

敵に同情してどうするんだって話だよ。殺したらそれで終わり。その先は無し。さようなら。

冷徹になりきれないからこんな間抜けな思考をするハメになるのだからと薫は切り捨てて、大きな大理石の階段を上る。

いや、上ろうとしたけれど辞めた。いつから居たのか相手さんがこちらに気づいたらしくてなんともまあ見下ろしていらっしゃる。

「ごきげんよう？」

「ごきげんよう」

うわ返した。やはり貴族様だ。すげえごきげんようとかいいとも後番組ぐらいしか使わない言葉だと思っていた。

「もうそろそろ来る頃だと思ってました」

にっこりと彼女は笑む。

表情がない顔など久しぶりに見た感じがする。

バラバラと初めてあった時くらいかな？ いやその前の私か。

「意識あるんなら聞くけど。アンタの中に飼ってる物を私に浄化させる気無い？」

無理と判つても聞いてしまうのはやはり似ているからなのだろう。

敵は自分のボロボロの体をなめ回しながら言う。

気味が悪い光景だ。痛くないのだろうか？

彼女の全身は骨が数本折れているのにも関わらず、まっすぐ立っていて、血は足下に滴になって垂れてきているというのに彼女は何ともないように笑う。

「飼っている？ これは飼っているというのでしょうか？ 私は飼っているというよりもまっとうしていると言ったほうが早いと思います
が」

纏っているねえ。殻の敵つてところかこれは。

ガリツと瞬間音がして右肩を後方に吹き飛ばされた。

薫は何が起こったのか判らないまま右腕を折られた事に今気づい

た。

「私ね。ずっと思っていたんですよ。人間は殻のまま生まれて殻のまま死ぬのではないかとずっと思っていたんですよ。だって本体はほら何処にもいないじゃないですか。自分というものが無いのなら本体はいないと思うんです。だから殻のまま人間を殺してしまつたら割れるんじゃないかと思つたんですが、やはり人間は堅いというのは本当なんです。なかなか割れてくれません。悲しい事に殻のまま死んでしまうのでよ」

階段を一段一段下りてくる毎にガリツガリツと音がしてそのたびに薫の体に車に跳ねられるような衝撃が走る。

「悲しいことでしょうか？ 本体はどこにいったのでしょうか？ 殻の私たちは何処にいくんでしようね」

殻の敵が薫と視線を合わせる。

「紹介が遅れました北条美咲と申します。以後 お見知りおきを」

黒いワンピースの裾を両手で掴んでお辞儀する。

ガリツ。そのまま屋敷の外まで吹き飛ばされた。

ああ。空が灰色だ。無駄に食らったけどやっぱり仕組みとかわかんないなあ。倒し方がいまいち掴めない敵はどうしろっていうんだろうね。全く。

そもそも自己紹介の時に攻撃してくるとかタブーだろ。王道漫画的にさ。なんだ名乗りあつてこそその武士道じゃないの？ あれ私って考え方古いのかな？

「どうしました？ 攻撃なさらないんですか？ 貴方はヒーローでしょ？ 私の敵なのでしょうか？ まさか馬鹿ですか？」

「そう褒められても返しようがないんだけど」

立ち上がると鼻血が出た。それを袖口でぬぐって薫は笑う。

「褒めた覚えは無いですが？」

「皮肉だよ。気付よ馬鹿女」

さ。どうやって倒そうかと思考する。

倒し方が判らない以上説得しか方法がないのだけれど、ごり押ししたって負けるだけだし、その前に私が貧血で倒れてしまう。ならばどうすればいいのかって話なんだけれど、秘密の力がある訳じゃないし、第三の目とか無いから意味ないし。どうしろって言うのよ。助けてツ！ 花丸先生！ 花丸ばかり付けないでたまには子供を『こんな問題もできないの？ 坊や？ お仕置きね』とか罵ってあげて！

喜んだら確実にMだからツ！

いかんいかん。あまりの強さに現実逃避した。

さて……解決作がないんならあれだね。玉砕覚悟というやつだね。神風みたいなものだね。

二度吹いてくれたらもつけもんだけど。

地面を漕ぐように蹴って最短距離で北条美咲とやらの胸元まで接近してのど元を掴んで叩き伏せる。

砂埃が舞う中でまたガリツと音がする。嫌な音だ。これ聞くとすぐさま衝撃がくるんだもんなあ。

そんな感想と共に左足が強い邀撃とともに真後ろに上がる。

「あああああああああああああああああああああああああああり得ない角度で上がり、骨盤から付け根をまるで鈍器か何かで殴られたような感覚。

「まだ足りないですね。まだまだ。割れませんか」

砂埃が消え去ると同時に美咲の蹴りが飛んでくる。

回避する暇すら与えない。水月に当たってもだえる。

そんなナリして肉弾戦も出来るのか。

薫が膝を付いた瞬間に美咲は先ほどとは違う足で薫の右頬を蹴り飛ばした。

数メートル吹き飛ばされてやっと停止する。

「おやおや。朝方の威勢はどうしました？ 私を倒すのでは無かったのでしょうか？ 私を倒すために此処に来たのではなかったのでしょうか？」

いったい全体どうなってるんだ。

あの音の正体が判らない以上どうしようも無いじゃないか。そもそもアイツは何なんだ。

みてくれは悲劇のヒロインみたいな格好してるくせになんで肉弾戦まで出来るんだ。

そもそもなぜ吹き飛ばない。なぜ攻撃してもひるまない。

右足は持ってたか。

立ち上がると右足の骨盤がギリツと悲鳴を上げる。知らず知らずのうちに奥歯からぎりぎり音と音が漏れた。

美咲はユツクリとこちらに近づいてくる

でも手の出しようが無い。

どうしたってあの音が邪魔で近づけない。

そもそもあの音って何なんだろう？ 割れないって事は割れそうになっっているのだろうか？ どこが？

全身をなめ回すように見てみても全然わかんない。

じゃあどうしろっていうのよ。

なんだそもそも勝てる試合じゃないって判ってるけども、なんていうかこう欲しいじゃんヒントとか！

その時、ガチリと何かが当たった。それは万年筆だった。

溜め息を吐く。なにが悲しくて万年筆とか出てくるんだろ。全く。

「……あんたさ。」ボールペンで人を殺した事あるかい？」

敵である彼女はクスクスと笑う。

「どうやってボールペンで人を殺すというのですか？ 貴方馬鹿じゃないですか？」

「ボールペンをなめちゃだめなんだよ。ボールペンって言うのはあの意味最強の武器でさ。私はこれで病院を壊滅させたよ」

「意味が分かりません」

「良い事を教えてあげよう。人が死んでも意識が行き着く先は何処でもない。天国もなければ地獄でもない。勿論あの世なんてない。

人間が死ねば仮面舞踏会さままで私たちを見守っているのさ」

「それで油断を誘おうとしている気ですか？」

「いや経験談だ」

ムクツと薫は起き上がると万年筆を指先でくるくる回すとそれを構えた」

「さーマジックをみせて上げよう。私を恨まないでね。ペンが此処にあるのが悪いんだから」

薫はふつと表情を消す。そのまま最短のルートでつかつかと歩いていく。

敵である彼女は余裕の表情で音を出す。ガキツと薫の肩が外されたが薫は何とも無い風に歩いていく。

敵である彼女はもう一度音を発生させる。次は足を折る気持ちで打つ。が一度倒れただけで薫は立ち上がって歩いてくる。

「な……」

初めて敵である彼女は驚きの表情を見せるがそれにも無反応。

表情一つ変えない。いやそもそも今の薫に表情が無い。何も無い。何があつた訳でも無い。文字通り何も無いのだ。空っぽではない。

空っぽという言葉すら存在しない。そこにいないのだ。

「こ、こないで！」

両足を折る。が薫はそれでも歩いてくる。痛みを感じていないのだろうか？

右手左手と折るが歩みを止めない。それどころか後数センチで捕まる。

敵である彼女は焦った。先ほどまで優勢だったにも関わらず今では劣勢である。たかが万年筆を見ただけでこのざまだ。

なんだというのだ。そもそも彼女の今の姿こそ敵じゃないか。それに比べたらわたしなんて……

グツと襟首を捕まれたと思うと、がくんと地面に羽交い締めにされた。両腕を両足で羽交い締めにされて彼女は万年筆をしつかりと両手で持つ。

見上げるその瞳には何も映っていなかった。いや何も映そうとし

ていない。はじめっから敵味方など今の彼女には関係ない。

じゃあ……彼女は本当にヒーローなのだろうか？ いや先ほどの謎かけみたいな質問に彼女はなんと答えたっけ？ 『私はこれで病院を壊滅させたよ』そんな事を言っただけか？ ずっとヒーローである彼女の事だから敵と戦う為だと思っただけだ。

ガスツと薫は万年筆を振り下ろす。

ああ。彼女は……私より前に人を殺していたのか。彼女もまた殻をもったんだ。じゃあ……私のこの今の気持ちは……
「思春期特有の自己意識だろうさ」

関西弁の女がいつの間にか片手で薫の顔を押さえている。

「まあ仕方ないわな。ガリって音も実はあなたの能力じゃなくて此奴の脳が拒絶する音やねんから」

「へ？」

「あなたは至って普通の人間。ただまあ人殺しには変わりないけど。こいつは勝手に自爆してあなたが勘違いしただけ。北条さんやっけ？ あなたは人殺しなだけだよ。ただ昔の自分を思い出して薫の奴が自爆しただけ。殻の敵はこいつなんよ。ほんとうは。いや殻じゃないなあ。こいつはな。敵に近い何かなんやろうなあ」

「でも音は出せましたよ。私が強く念じれば……」

「そりゃそうや。薫がそう思い込んだんやから。あなたが何かしてくる。だから音が出る。吹き飛ば。みたいなね。こいつは昔の自分に負けたのさ」

151

全治三日という大けがを負った。

いや意外に長いんだよヒーローの怪我としては。何が起こったの

かは全く判らないんだけど……とりあえずボールペンみて相変わらず記憶が飛んだという記憶しかない。

いやーまあ相手殺してなかったからいいんだけども。あの子は識髪がちゃんと事後処理と匿ってくれるらしい。とりあえずは一安心と言ったところだろうか？

いやー私も危なかったと言ったところだと思つ。ただ。そう。記憶を失つたのは悪いと思つ。確かに悪い事だと思つ。でも……でも

……
「はい。バラバラ。あーん」

「……あ、あーん」

なんで識髪とバラバラが果物食べさせあつていいるのだろうか？ なんだ。これが噂に聞く放置プレイってやつか。

「ちよつとバラバラアなんで私の部屋に識髪が居るのよー」

「そんなの……ね、ねえさんを連れてきてくれたのは識髪先生なんだから仕方ないじゃないか」

「そうやそうや。恩はかえさなあかんやろ。だから私はバラバラからリンゴをあーんして貰う券をもらったんやないか」

券なんか発行してたんだ。それじゃ膝枕券とか腕枕券とかあるのかな？ あ、それちよと欲しいかもしれない。

「あんたが気失つてたんやから仕方ないわな」

「そんな事言われたつて全然覚えてないんだから仕方ないじゃない」

「そんなんウチに言われても仕方ないわ。あ、もうええよバラバラは持ち場にもどり」

リンゴを剥いてきた皿を持ってバラバラはリビングへと戻るのだから。ごゆつくりと残して私の部屋から出て行った。

結局私はリンゴ食べれなかった。

「で？ 何しに来たのよ」

「何しにもなにもあんたを笑いにきただけや」

「最低だね。死ねばいいのに」

「死ぬか阿呆お。お前が死ぬ」

沈黙が部屋を包んでいる。そもそも識髪と話す事はあんまりないんだから仕方がないと思う。

「北条さんやつけ？ 本部がちゃんと世話してくれるって言うてたわ」

「そう。なら安心と言えば安心ね。本部じゃだれも手出し出来ないから」

「そうやな。ただ……まあずっと彼女は疑問抱えたままやるうな」
「疑問ね。いつかあんな疑問はれるわよ。しよせんは自分が考えてる思考回路なんてたかがしれてるんだから」

「経験者は語るってやつやね？」

「わっかんない。ただそう思うだけよ」

識髪はポケットからキセルを取り出して葉っぱを摘める。

「あんがい過去は過去って認める奴やってんな。自分」

「ほつといてよ。何も悪い事なんてしてないわよ。私は」

「そうかい。それならいいわ」

キセルに火種を入れてふうーと吐き出す。

「さすがに上位クラスの元敵さんやね」

「それを言わないで。今はバラバラが居るんだから大丈夫よ……」

「ほんまか？ 私にはそうはみえんかったけどな。あんたはいつか壊れるで。いや実際あんたは二回壊れてるんよな確か」

「……………」

「ふうーまあええわ。そんな事私には関係ないし。とりあえず今回はご苦労様やってよ本部からの通達。それだけ……」

識髪は立ち上がり部屋を出て行こうとノブに手を伸ばす。

「ねえ？ 識髪？」

「ん？」

「バラバラに自分は姉だつて伝えなくて良いの？」

少ししてから彼女は答えた。

「柄じゃないわ」

扉が閉まった。少し悲しそうに見えたのは気のせいだと思う事にした。

第三話：固定概念の敵

チクタク、チクタク、チクタクタク。

1

「よう来なさった。まあ座りなさいや」

壁一面のネジ巻き時計。

振り子時計から懐中時計。

果ては腕時計から仕掛け時計まで何でもありだ。

その秒針は1分1秒と狂っておらず、それほどまでに正確だと逆に恐怖すら感じる。そんな恐怖を感じながらも渋々、薫は老人に促された席へと座った。

「先にコーヒーでも入れようか。いや、お嬢さんには紅茶の方がいいかな……」

茶色いニット帽をした老人がニコリと笑う。

サンタクロースを連想しそうな顔立ちである。

「いえ結構です。此所に来るのは私が覚えている限り“七回目”ですから……それよりも私は話を進めたい」

「そうか……。美味しい茶っ葉が手に入ったのだが。そう言われたら私は従うしかないな」

老人は浮かした腰を降ろして、白い眉を上げて薫に聞く。

「さてではお嬢さん。話を聞こうか？」

時計店の主は白い入れ歯を見せて、ニヤリと笑う。

「単刀直入に言いますよ。今すぐに世界の連鎖を止めてください。時計店の主はフフと笑い、眉を上げる。

「何が気に入らん？ ループがそんなに嫌いかい？」

チツ。チツ。チツ。と秒針が時を刻む。この音がどうも薫は崩壊に向かって刻んでいるようにしか聞こえない。

「同じ日常を体験した所で何の意味があるんですか？」

「ふふ」

「何がおかしいのです」

「いや、失敬失敬。君が言う同じ時間というのがワシの考える時間と全く違うからつい……な」

老人は含み笑いを浮かべて薫を見る。孫でも見るかのようなそんな柔らかい瞳で見つめる。

薫は思う。

何故この人が敵になるのだろうかと思む。敵という概念は何かしら世界に恨みがあったり、世界の真理に絶望したりと大抵は世界に嫌気がさして敵となる場合が多い……識髪や一ヶ月前に起きたバラバラの事件がそうだ、薫の目の前に居るこの老人には敵になる要素が全くと言っていいほど無い。

これは薫にすれば力は確かに老人を中心に展開しているが、敵なのか敵ではないのかその判断が付かなければ薫は拳を振う事が出来ない。

「同じでは無いとはどういう意味でしょうか？」

「言葉通りさ。君は勘違いしているようだが時間がずっとループしてても同じ事を繰り返す人間など稀なノさ。ゼンマイを巻いたブリキの人形が全く同じ位置を歩くかい？ それと一緒だ」

まあ……機微の変化に気付くか気付かないかの話だけどねと老人は付け加える。

「その機微が同じでは無いと言いたいのですか？ でも大きな流れは変えられませんよ」

「確かにお嬢さんの言う通りだ。森羅万象を変える事など人間には不可能だ。それが時間などという大きな大河を変えるなど無理じゃろうな」

「では何故ループを……」

そう言い終るか終わらないかと同時に見慣れた天井が目に入った。また此所からかと薫は額に手を当てたまま溜め息を吐いた。

「死にたい……」
そんな言葉がため息と同時に口からこぼれた。

第三章

『固定概念の敵』

「今日午前六時頃旭区沢宮二丁目で火災が発生しました。その火事はおおよそ民家四件を焼き尽くし、現在も消防隊が鎮火に当たっておりますが……」

テレビを見ながら一言一句間違わずにキャスターの言葉を反芻する。

バラバラは間抜けな面でトーストを啜えたまま、啞然として薫を見ていた。

「姉さん。どうしちゃったのいつたい」

「簡単よ。三十回くらい同じ事聞いてれば嫌でも覚えるわよ。あとね。バラバラ。今日の晩ご飯はすき焼以外がいいわ」

「え！？ えー！！ 何で判ったの姉さん！ 僕今日すき焼にしよっつて何で判ったの！」

いつもと同じ反応。いや、いいんだけどね別に。

ただ、ただ毎日見ている身の私としては……変わらないうバラバラの反応は拷問に近い。

「実はお姉ちゃん超能力使えるようになったのよ」
「えー！！！」

もうどうでも良くなってきたので流す。

「とりあえず今日はすき焼以外でお願いね？ 流石に三十回もすき焼だと飽きるよ」

溜め息を吐きながらチャンネルを変える。どれもこれも様変わりしない番組で飽きる。

「あー姉さん。何で消しちゃうんだよ。今日の天気見たかったのに！」

「今日は晴れのち雨よ。一時頃に雨が降り出すから、その時間までに洗濯取り込んだり、買い物に行けばいいわ」

「コーヒーを飲みながらそんな事を言う。」

「姉さんの好きな今日の占いは」

「私が八位であんたが三位」

この三十のリフレインで、当たった覚えなど皆無に等しいのだけれど……

所詮占いは占いという事だろう。当たるもハツケ当たらぬもハツケ。

不思議な顔をしたバラバラの頭をクシャクシャに撫でると薫は立ち上がり、鞆を持って家を出る。

いつもより三十分も早い登校だが気にしない。

同じ日、同じ時間に出た所で変化などしなかったのだ。

だから少しでも変えようと一分単位で家を出る時間を変えていると、気付けばこんな時間に出る事になってしまった。

大体、後三十分すると学園へ続く学園坂は人で溢れかえるのだが、今は学生服を着ている人間は薫一人しか居ない。

カーボン柄のマフラーをキツく首に巻き直しながら薫は無意識に肩を上げながら学校へ向かう。

「どうして私はこうも勤勉に学校なんて行ってるんだらうなあ……」
勿論、このループの間に色々な事をしたのも事実だ。

競馬やって当てたり、銀行強盗やつたり、バラバラ襲つたり、無駄に男はべらかしてみたり、クソ高いだけの料理食べに行つたりとしたのだけれど、たった一日という尺度で出来る事などあまり無い

のだ。

それこそ一夏にしか生きれない蝉のように短い時間で楽しむ事など出来やしない。

死ぬ事すらままならなかった。

そもそもあの老人を倒すだけならば、簡単に出来る。

ただ単純に捻りつぶすことなど一日もかからずとも容易い事だろ
う。

ただ、薫はそれを出来ずに居た。

薫の力には制約がある。

敵と見なした者のみ力を発揮する。その制約がある。

だからこそそのヒーローの中で下から二番目なのだ。

勿論、制約無き者も居るがそれでは我々が敵とみなす人間と大差
無いのだ。

それゆえに薫は自分の力に制約を設けた。それがこの力の源でも
ある。

助ける事も動く事も出来なかった自分への戒めでもある。戒めと
いうか罪だ。

「……さぶ」

色々と考え込んでいると気付けば正門前に居た。

早く来過ぎたと思う。というか三十分前に家を出たことすらな
かった。

いつもなら、この時間はまだ家で寝言垂れながら涎垂らして起こ
しに来たバラバラの顔を蹴って、布団でぬくぬくしてる筈なのにな
あとか思いながら薫は校舎へと入る。

靴箱から上履きを履き替えて二年校舎である東館の方へと向かう。
正門前が三年校舎と移動教室。渡り廊下を渡って東が二年校舎と
部室棟。一年は南館と体育館と食堂となっている。

カタカナの『コ』を反対にして貰えれば分りやすい。

渡り廊下を進むと何食わぬ顔で霧恵と出合った。

「ありゃ？ オルちゃん早いねえ」

「何でアンタがこの時間に此所に居るのよ……」
啞然とする。

神林 霧恵は数少ない薫の友達である。

黒いお尻まであるうつつとうしい髪と、前髪ぱつつんで揃えた日本人形のような顔立ちで、本人曰く泣き黒子がチャームポイントらしいが、泣かされてばかりいる女の子だ

しかし神林 霧恵はこの日、遅刻ギリギリに学校に来る筈だった。
「え？ ああ弓道部の朝練があつたからそれに行ったの。私、副部長だし」

「いやでも、それは……おかしい」

「なにい？ 私が頑張っちゃ駄目なお？ オルちゃんそれはヒドいよぉ」

クスクスと肩で笑いながら霧恵は口を隠して笑う。

「いや、でも……」

ループが狂ってきてる？

いや、でも同じ時間は無いとあの老人も言つて居た筈である。ならばやはりこれも機微の変化なのだろうか？

ただ何処からが機微なのだ。些細な事かも知れないが機微とは何処から何処までを指す言葉なのだろう。

そもそも霧恵が遅刻しそうになると、霧恵が朝早くに来るのは機微なのか？

じゃあ時間の大筋とは何処なのだろう？

あの老人は世界に対してループをかけていたのでは無いのか？

「どうしたのオルちゃん？ 難しい顔して……」

ハツと気がつくとも霧恵が黒髪を垂らしながら後ろ手にして薫を覗き込んで居る。

肌白いなあとか薫は考える。

さつきまで考えていた思考は吹き飛んで、雪のように白い肌と墨を垂らしたような黒髪は反撥する事無く、彼女に良くも悪くも似合いですぎていて羨ましいを通り越して嫉妬すら感じる。

そのまま二人は見つめあつたまま動かない。
白い眼光と真つ黒な眼球が近付いてくる。
ん？ 近付いてくる？

「チュツ」

キスされました。

ごめん。訂正。

キスされましたorz

「えへへへへ」

「あはははは」

「えへへへへ」

「あはははは」

二人見つめ会つて笑い会つ。

反応を伺うにしろ先に笑われたならば笑うしか無い。

いや、ぶつちやけて話しますと私、不肖この女子校生である朝比

奈 薫は先程のキスがファーストキスでした……。

愕然と崩れ落ちてその場で泣く。

「初めてだったのに……フレンチもまだなのに……」

「え！？ 嘘！ ごめんねえ。何かねえオルちゃんの顔見てたらし

たくなつた」

「したくなつたからつてキスする……普通？ つうかねアンタは誰

彼構わずキスするのは辞めた方がいいつてあれほど言ったのに」

「失礼なツ！ 私はねえ可愛い子と女の子にしかしないも〜ん」

プンスカプンスカという擬音が似合いそうな怒り方をしながら霧

恵は腰に手を当てて怒っている。

神林 霧恵。

日本人形のような独特の可愛さで、泣き黒子がチャームポイント
の彼女。

立てば芍薬、座れば牡丹を体で表し、廊下を歩けば男の子に声を
掛けられ、教科書を忘れてたと言えば三年だろうが一年だろうが教
科書を貸しに来るといふ伝説を残した彼女の正体は……

「だって私、百合だも〜ん」
なまじ可愛い過ぎて死ぬかと思った。

2

「かーおーる。聞いたよ。あんた遂に霧恵に唇奪われたんだってえ？　しかも初めてなんだって？」

褐色の肌に茶色い髪。

「うっさいなあ。私に構うな。構うなッ！　ほっといてよ。いい加減泣くぞ！」

伏せっている薫の頭に肘を置きながらニヤニヤと喋りかけている。

「ほう……そんな口を私に聞けるのか。噂の弟くんには言えばどうなることやら」

ガバツと肘ごと顔を上げてブレザーのリボンごと掴んで顔を近付ける。

「彩葉……そんな事したら、あんたを○つたするからね」

「何。その伏せ字ッ！　何気に怖いんだけど！」

「ピーでもいいわよ。モザイク処理でグチャグチャにしてあげてもいいわよ。その豊潤な胸使ってピーでピーして○っちやうわよ」

「殆ど伏せ字じゃん……」

「『ごめんなさい。本当にごめんなさい。だからもう臭いおピーで私の○○○○をグチャグチャにしないでえ。ああまた中は……』と
いう台詞を生で言わすわよ」

「鬼畜じゃんッ！　もろ肉○器確定じゃん」

「くふふふふ」

「ごめん。もう言わないからその笑い方辞めて……ものすごく怖いから」

東条 彩葉。

この人も数少ない薫の友達である。というか霧恵と彩葉以外に薫は友達だと思っっている人間は居ない。

友達というのは信じれるか信じられないかの違いで、それ以上でもそれ以下でも無い。

それが一番重要な事なのだけれど。

例えば裏切ったり裏切られたり、利用したり利用されたり、友達だと言って惑わしたり、表面だけ繕って友達だと言っしてみたり、それは輪という枠組みが欲しいだけの人間にしか過ぎない。

輪を得るとはそういう事。

そうやって騙し騙し生きて居るのが人間なのだ。

ただ、始めから輪というものを作れない人間だっっている。

それが薫と霧恵と彩葉だ。

薫は勿論、人など興味は無く、良く独りを好む。それゆえに異物扱いされて薫は孤立した。

霧恵はなまじ性格も顔もいいからか、幼少の頃から苛めを受けた。そのトラウマの為に未だにあの舌つ足らずに言葉を話す。あの喋り方は頭を悪く見せようとする彼女の悪い癖なのだ。

頭が悪ければ構って貰えるというそういうトラウマなのだ

彩葉は褐色肌の容姿の為にウリの噂が絶えない。

彼女の肌はサーファー焼けなのだが、周りはそれを認めない。根も葉もない噂を立てられ、彼女は呆れ果てて輪から抜けた。

そんなはみ出し者を集めたのが、何の因果か薫だった。

霧恵の時は苛めている現場をバスケットの試合中に目撃して、相手の顔にロングパス決めたら何か懐かれた。

彩葉の時は町でバラバラとラヴラヴして買い物をしている所をバイト中に目撃されてバイト禁制の家の学校に言わない代わりに秘密を共有するという理由で友達になった。

そんなこんなで何をするにも三人になった。

御飯を食べる時だっって、体育の班決めだっって何故か三人一緒にな

った。

それが薫には居心地がいいのか悪いのかは未だに判っていない。始めての感覚だったから。

「ん〜なにい？ 私のお話しい？」

霧恵が間抜けな口調でお弁当を持って集まってきた。

「別にアンタの話なんかしてないつつの。つつかね？ 何でアンタ達は毎日毎日当たり前のように私の席に寄ってくる訳？」

溜め息を吐きながら問い掛ける。

毎日毎日同じ事を繰り返し繰り返し伝えて居るのにも関わらず、この二人は毎度毎度お弁当を持って私の席に集まってくる。

「いいじゃん別に。アンタはいちいちいち何か付けてそう言うんだから」

薫の席の後ろから誰のものかも判らない椅子を持ち出して彩葉は座る。

霧恵は霧恵で自分の椅子をちゃんと持参しており、私の机の端にすまなさそうにお弁当を置いて、私と彩葉の反対側へと座る。

ヒソヒソと教室の隅から嫌味タップリの陰口が聞こえて来るがそれを無視して、薫は自分の鞆からバラバラが作ってくれたお弁当を開く。

「うわぁ。マジで超旨そうなんだけど……薫のお弁当」

「そんな事言っても、あげないわよ」

「自慢の弟お君があ作ってえくれたんだもんねえ」

のびのびと霧恵はそんな事を言う。

「あなたに馬鹿にされると、何か通常より二倍腹立つわ」

「そんな事いっただってえー私だつてわざとじゃないものー」

「じゃあ最初っからちやかすな」

水分を含んだエビフライを啜えてそう返す。

「そういえばさ、全然関係ないけどエビフライのしっぽって食べるタイプ？ それとも残すほう？」

彩葉は真面目な顔してそんな事を口走る。

「いきなり何の話よ？ いいじゃない。チヨココロネが下から食べようが上から食べようがどっちだって……そもそもチヨココロネなんて食べなきゃいいのよ。昔の高飛車の女がいったようにパンが無ければ青酸カリを飲めばいいのよ」

「すっごい嫌なマリーアントワネットだな。そもそもその時代から青酸カリってあったのか？」

「さーそこまで頭よくないからわかんない。そもそもそっちじゃなくて私としてはチヨココロネのほうを突っ込んで欲しかったわ」

「ああ悪い。今ひとつあのオタク漫画のなにが面白いのか理解できなくてさ」

「メガネ死んでるからね。そもそもあれってオタクがオタクの事描くなんて最強の嫌みだと思っるのは私だけ？」

「そういう皮肉な解釈しか出来ないから、人間もまともじゃないんだよ」

「あんに言われたら終わりだと思うわ……で？ なんでいきなり青酸カリの話なのよ？」

「それあんながいったじゃん！ 私青酸カリとか一言も言った覚えはないわよ！」

「あれ？ そうだったけ？ 確かに青酸カリはメロンソーダと似てるからって、私が青酸カリとメロンソーダ変えてあんに飲ませたりしないから大丈夫よ」

「何でそんなに具体的なのッ！ おねーさんビックリだよッ！ 失禁しそうな勢いだよ！」

「失禁するなら栓をふさげばいいじゃない」

「そんな使われ方するなんてマリーアントワネットもビックリだよ！」

「で？ エビフライがなんだって？」

「あんな相変わらずムカツク返すするよね。いやだからエビフライ

の尻尾食べるか残すかって話よ」

「そんな事聞いてどうすんの？　つかどうすんの？」

「いや、気になったただけだけど……」

そういうと彩葉は私から目をそらした。

「いったいなんだって話なんだろう？　別にどっちでもいいとは思
うのだけでも。そもそもエビフライの尻尾なんて残そうが食べよう
が害のあるものじゃないんだし、それを聞いた所で彩葉に良い事な
んで一つも無いと思うのだけでも。」

「ただの疑問？」

「そ。ただふと思っただけ」

「じゃあ多分残すかな？　カリカリに揚げてるエビフライなら食べ
るけど、しわしわの尻尾とかはゆるい感じがして喉につまるから好
きじゃない」

「ほえー」

「だからなんなのよ」

「いや結構食べる人が多いんだよ。80%ぐらいかな？　でもあ
んたは私の思ったと通りに食べないを選んだからなんかそうだよなあ
って思った」

彩葉は照れる。照れられても困る。百合ツ子は霧恵だけでもう十
分だ。

「なにが嬉しいよ気持ち悪い。そんな事考えても人の趣味も人の性
癖も勿論趣向だってその場限りしかないっていうのに」

「どういう意味？」

彩葉が不思議そうな顔をして聞いてきた。

「そんなものの人の流れみてたら判るでしょ。芯が無い人間なんて沢
山いるわよ。それこそこの教室見てみなさいよ。仲良かった人間が
いつの間にか敵になってたり、いままで好きだって言ってた人間が
手のひら返したようにきらいになってたり、前好きだった物が流行

が終わったからってどうでもよくなったり、人の趣向や趣味とかって結局はそういう物でそれって結局はその場限りの嘘って事になるのよ」

お弁当の中にきんぴらごぼろが何故か入ってた。隣を見るとニコニコと霧恵が笑いながらきらいな物を私に勧めていた。

「あんたねーきんぴらごぼろ食べれるようになりなさいって何度もいったでしょ？」

「だってえあのこりこりする感覚がきらいなんだもん」
「子供か」

そんな事いいなが口に含む私も私かも知れない。

「でも流行と趣向は違わなく無い？」

「何がどう違うのよ？ 私はどう考えてもそうとしか思えないわよ」
「いやだつてさ。趣向は自分が前から好きなもので流行は今好きなものじゃないの？」

「あーそういう見方は確かにあるわ。あんたの言うことは間違いではないわね」

「でしょ？」

きんぴらごぼろを私の弁当に入れる作業を辞めて霧恵が喋る。

「でもおそれでもお流行と趣向と違って関係はあるとおもつなあ。

ダイエット特集とかでダイエットに効きますとか言われたら私いつの間にかピーマン食べられるようになったもん」

「そんなこと云われてもというか、そのやせ細った体のどこにあんたはまだ痩せようとか考えるわけ？ 嫌み？ それって嫌み？」

「薫は体重の話になると食いつきがよすぎなんだよ。いいじゃん別に。ぶにぶにでも」

「違います！ 筋肉ですうー私のは脂肪じゃなくて筋肉ですう。だから胸も無いんです」

自分で云つてて空しくなった。というか死にたくなかった。なぜか知らないが泣きたくなかった。ちよつと涙目だった。

「泣いてい？」

「あんだ相変わらず自爆好きなあ」
自爆というより自虐だよとか突っ込みを入れてみた。
二人の視線が薫るの胸元に行く。
薫は泣きながら教室を出て行った。
胸は無いが器はでかいもんって自分で思う事にした。

31

学校で泣き疲れた薫はというか学校で泣くのは初めてなような気
もしないでも無いが、彩葉が帰りにピエロの人肉を使っているハン
バーガーをおごってくれろというので渋々つきあうことになった。
「いつまで拗ねてんだよ。いいじゃん。薫は胸ないほうがかわいい
って。だっておまえ。薫が巨乳キャラなんてなってみろ。すごく気
持ち悪いぞ」

彩葉が薫の肩に手を回しながら機嫌を直すために何ともわかりや
すいおべっかを使って慰めている。

「えーっと。えーっとね？ オルちゃんは巨乳になりたいんなら私
の少しあげるからね？ ね？」

「おまえ。遠回しに嫌み言っでどうするんだ」

「だって肩こるし。あんまりいいことないんだもん。あげれるんだ
つたらあげるよお」

「だーそんな事いうなあ！！ ますます薫が惨めになるだろうが！
！」

「おまえら二人帰れ。私の前に二度と姿を見せるな……………」

四人掛けのテーブルに腰掛けながら薫はポテトをリスのようにか
じりながら目の前に座る霧恵の胸をずっと見ていた。

もちろん、涙目で。

「いいなあほんとうらやましい。なんでこんなにも同じ人間なのに
こども違うのだろう」

神様は確実に不公平だ。霧恵は多分神様に賄賂でも渡したに違い

ない。

私は確実に神様に喧嘩売った結果がこれなんだろう。

ああ。殺せるんなら神様殺したい。

だからアダムとイブに裏切られたりするんだ神様の糞野郎め。人望ねーんだよ。

「というかあれだよ。ここに来たところで何か話す話題というか話題も無いのは確かなんだけど。どうする？ このあとぶらぶらと買い物でもする？ 久しぶりに薰もつきあってるし」

そんなに私はつきあい悪いつもりは無いんだけども、でもまあたまにはというか一度くらいはハメはずしてもいいかもしれない。

古今ところ毎日、時計屋に会いに行つて毎度ループループだからそれはそれで気晴らしになるかもしれない。

「じゃあさ。じゃあさ。時計屋でもいかない？ すごい時計屋があるんだつてさ。壁一面時計だらけで。老人一人で経営してるらしいんだけど、それがまた暇らしくて毎度いくと紅茶とかコーヒーとか出してくれるんだつてさ」

「へえ」

……………なんだろうこの不愉快さは。

そもそも今日は忘れようと考えていたときにこの仕打ちか。私に確実にループ止めてくれつて事を遠回しに云つているのか？

なんなんだ厄日か。やはり神様は私が嫌いなのか。

「私は賛成だけど。でもその前に下着とか服とかみたいかなあ」

「じゃあ先にモール行つてその後行くつていうのはどう？ 別段何も無いんでしょ？ 今日は何？」

帰ればバラバラがご飯を……………

「よし。何もないつと。じゃあさっさといきますかー」

有無も云わさずに連れて行かれた。まだフィレオフィッシュ残つてたのに…………

そんなこんなで現在モール。

正直。バラバラからは小遣いとして一万円はもらってるがあまり使った覚えが無いのでどうしていいかわからない。

そもそも。そういえば前の私はどうしてたっけ？ とか思い出しながら多分、はなしをあわせていたのだろうと云うことだけしかわからなかった。

だから適当に見て回っていると遠くから霧恵がキーホルダーを持って走ってきた。

「オグちゃんオグちゃん。これおそろいで買わない？」

見てみると人差し指ぐらいのぬいぐるみで。怒っている女の子と泣いている女の子の二つが霧恵の指に挟まっていた。

「なにこれ？」

「えーっとね？ 性格ぬいぐるみ？」

「なによその性格ぬいぐるみって……」

「自分の性格をぬいぐるみであらわそうみたいなお感じのおぬいぐるみ？」

「わかんないのに持ってきたのっ！」

「だってえこれオグちゃんそっくりだもん」

ニコニコ顔の霧恵から視界を外してぬいぐるみを凝視してみるが……私とはとうてい似ても似つかないほどの顔立ちだ。

そもそもなんだうが。っつて。私ってそんなに怒ってる感じがするの？ するの？

「似てないって……」

「そっくりだよー。うがーってところがポイントです。もうピンポイントです。ロックオンです。波状攻撃です」

「まさかの戦艦規模っ!？」

「かおうよー。この泣いてるのが私で。ついでにこの……じゃじゃーん」

効果音付きで出された人形がゲラゲラと笑う。先ほどとは違う女の子のぬいぐるみ。

「これがアザちゃん」

「似てないって……」

「いいじゃん性格人形なんだからさあ。私たちの友情だよお」

「なんかのろいのにんぎょうっぽくてやだ。私たちの友情を裏切つたらので怖い」

「裏切れば格兵器です」

「まさかの地球滅亡フラグっ!？」

「北朝鮮がテポドンです」

「あれでしょ？ てんぷらが上に乗ってるやつだよね？」

「それ天井です」

「そっかあ……天井かあ」

「買おうよじゃなきゃヤンデレになって刺すよ」

「怖いよっ!？」

「アイスピックで刺すよ！ ずたずただよ。牡丹と薔薇はどっちも綺麗だよ！ 二階から突き落として笑うとかあそこまでいけば爆笑もんだとおもうよ！」

「わかったから。わかったから買うから。買うから。それ以上喋らないで」

「涼宮ハルヒは結局はクーデレとツンデレと巨乳キャラを出しただ」
「それ以上いうなあああああああああああああ。いやストーリーとかしつかりしてるよ。うんおもしろいし」

モールに来てテンションが最大級に上がっている霧恵に押されてぬいぐるみ770円をお買い上げ。

無駄に高くて後悔した。

「オグちゃんオグちゃん。一緒に携帯につけよ。携帯に」

携帯といわれてもなあ。携帯なあ。

「ごめん持っていないのよ実は携帯………」

「へ？」

驚いてる。驚いてる。

「なんで？」

「なんでって、あんまり必要ないかなっておもってさ」

「悪い遅れた。そんなに買うつつもり無かったんだが、なんか見てたらほしくなつてさ」

「なに買ったのあ？」

「ん？ ああ。水着とか春物とかその辺」

「水着はまだ早くない？ 時期的に」

「いやでもなんだかんだで波乗りには必要なのよ。ウェアはなんか着心地悪いときあるし、その中に着る水着だつてすぐだめになるしさ」

「そんなにすぐ痛むもの？ てか波に乗ってなにがたのしいのか私には疑問だわ」

「そうか？ 一度でもラウンドハウスカッターバックとかチューブの中とか体験したらもう病みつきたぜ。すっげーの上に波があるんだから。しかもチューブの中にいると外と中がわかんなくなってくるんだけど、その先の景色がすごく鮮明に映るのよ。一度やったらもう病気だよ。まあはじめの頃はボード折れたりしてたいへんだつたんだけどさ」

全然意味のわからない事を専門用語で並び立てられても非経験の人間には全然わからないわけでして……でもすごく楽しそうに喋る彩葉を見てるとなんだかこつまで満足してくるから不思議だ。

「そんなわからない事はどうでもいいからあとりあえずは携帯買っていくこうよー」

「わかったからそんなに急ぐなつての。いけばいいんだろいけば。」

「シヨップは逃げないんだからいいじゃんか」

「わかつてないなあ。初めての経験だよ。夏の日の経験とはまた違うんだよ。いわゆる初体験だよ。オグちゃんの初た」

「やかましいわ！ 初体験初体験連呼すな。恥ずかしい」

とりあえず、彩葉が荷物置きたいということでコインロッカーに荷物を預けて、そのままモール内にあるたくさん携帯シヨップを見て回る。

色とりどりの携帯をみながら思うのだが。こんなに機能増やして

どうするんだらうか？

なんなのだろう？　しまいには携帯一つで何にでも出来てしまいうような気がする。

「オグちゃんこれは？　これ？　DSN-10だってメールに名前書き込むとその人死ぬんだって！？」

「私はこつちかな。必ず着信がある携帯だって。なんか未来から動画付きでメール送られてくるらしいよ。つかそれならメールアリだよね？」

「あ、これは？　デスマッチだって」

「何がッ！？」

「こつちはどうよ？　天然素材」

「意味わかんない。何が天然？　どう見たって人工じゃん」

「繁殖用」

「すげーの来ちゃった！？　繁殖とかきちゃったよ！？」

「VOCALOID初音ミク」

「初音ミクっていつてんじゃん！　伏せ字つかってないじゃん！

てかPCソフトじゃん！」

「液体窒素」

「もう携帯ですらないッ！？」

「君のために鐘は鳴る」

「どつちでもいいよッ！」

「携帯用」

「何がッ！　何が携帯用ッ！？　そもそも携帯なのに携帯用？」

「お京阪」

「京阪じゃん。阪急線高田行きじゃん！？　てか列車じゃん」

「パーティは全滅しました」

「Aボタン連打しすぎ！」

「まさかのボス戦」

「会話すんなおまえら！！！」

「テレレテッテッテター」

「レベルアップすなッ!?!」

「デンドロデンドロデンドン」

「冒険の書消すなッ!?!」

なんで普通なのが一個もないんだ……おかしいだろ。

そもそもなんでドラクエ? てかなんでドラクエ?

「あこれは? 白いの。本体価格0円でワンセグとか見れないけど、でもメールとか電話だけするんならシンプルなのが一番だよ」

「もうなんでもいい」

激しく疲れたよ。

記入用紙に書くと保護者欄が出てきたので識髪の名前を書いてそのままにしておいた。

なにかあればあいつが何とかしてくれるだろう。

その真新しい携帯とやらをとろうとしたときにすかさず、霧恵が携帯をもぎ取っていった。

その隣で彩葉が自分の携帯をあけてなにやら霧恵と話し込んでいる。

「はい。おっけー。これが私と彩葉の携帯とアドレス。いつでもメールしてくるんだよ。私もメールするし」

初めて持った携帯というのは以外に重くて、それ以上になんか心の中が変にかき回されるような感じがして、妙に落ち着かなかつた。

「じゃあこれからどうする?」

彩葉が楽しそうに語る。

「私は激しく疲れたから帰りたい……………」

「まだ帰るには早いよお。そうだ。プリクラとろ。プリクラ」

「あ、いいねえ」

何が? 何がどういいの? そもそもプリクラとかフリクリとかどう違うの!? てかプリクラって流行終わって撤去されたんじゃないの!?

帰りたい衝動が出てきている薫の首根っこ掴まされて、ずるずると霧恵に引きずられていく。

「そういえば、結構初めてだよねえ。おぐちゃんがこんなに遅くまでつきあってくれるの」

「ああ。そういえばそうだな。薫は気づいたら教室からいなくなってるもんな」

バラバラがご飯作って待ってるからに決まってるからでしょ。ああ。多分今でもおとなしくジグゾーパズルでもしながら、待ってるんだろうなあ。

「ああ。そんなこと云うと帰りたくなるじゃない!？」

「今日はだめえ。プリクラ撮ってその後にクレープ食べて彩葉の言つてた時計屋に行くんだもん」

せめて時計屋だけでも入れてほしくないものなのだが……

「なんであんたはそんなに元気なのよ……」

「だってオグちゃんと一緒だもん」

笑いながら言われると反論すら出来なかった。

4

カチカチカチと一定のリズム。

チクタクチクタクと孤高の変速。

水のような煙に包まれているかのような感覚がある。

「よう来なさった。まあ座りなさいや」

老人は語る。夢のような昨日と全く同じ台詞を語る。

やはり壁一面の時計は1分1秒とも狂っておらず、それがなぜだか威圧感を感じていて先ほど食べたクレープをはき出しそうになる。

「三人組とは珍しい。てつきり今回も一人だと思っておったよ」

老人が私に向かって口を開くがそれを無視。

今日は相手にしないと決めたのだ。ならば私だけでもその言い分けを守ってやる。みみっちいがそれぐらいしか私には抵抗できるすべがない。

「うわあすごい時計の数」

「これはまた……………」

二人して感嘆の声を上げている。それほどすごいのだろうか？ 私には自爆装置にしか見えない。

最後の1秒まで狂うことのない時計など、終焉に向かって進む黙示録ではないか。そんな自爆装置ほしくはない。

「おや？ お二人さんは時計が好きかい？ それはいいことだ。少し待ってなさい。おいしい紅茶の葉っぱを手に入れたところなんだ、入れてこよう」

老人は腰を浮かせたと思うとその場で少し停止する。

「今回はいいのかい？ 私に紅茶を入れさせても……………」

「……………」

「ふふ。ご自由に、か。そえれはいい答えだ」

老人はカウンタ・横に常備されている石油ストーブの上に置かれてある銀色のポットを取ると、花柄のマグカップに葉をくゆらせて、湯をながしこんでいく。

「うむ。いいにおいだ。私はこの香りがたまらなく好きでね。なんとも言えない感覚になる。私はどうやってもこの紅茶というものには夢を感じてしかたがないのだ」

薫にしゃべりかけているのだろうが、薫は何も言わない。言うつもりもない。答える気すら無い。

ただ、壁にかけられてあり時計の音がうるさいと感じるだけだ。

霧恵と彩葉は二人してなにやら時計を見上げながら止まっている

……………止まっている？

「彩葉？ 霧恵？」

いすから立ち上がるうとすると、立てなくなっている事に気がついた。

「時計というのは不思議なものでね。動いていると時間は間違いなく刻んでいるんだと勘違いする。それはいかげなものと私は考えてしまう。時計を信用しすぎて何か肝心なものを忘れてしまうよう

な気がして仕方がないのだよ」

老人はマグカップを私の前に置くと先ほど座っていたいすに腰掛けた。

「何する気？」

「何もしないさ。何もする気も無いしね。ただ、君と落ち着いて話があったただけだ」

「何の話よ。いつもはぐらかすくせに今更何を語るというの？」

「いや。簡単な話さ。君はループだと語ったが本当にループだと思っっているのかい？ そもそも時間という概念は進んでなければループなどしないのではないかい？」

老人はそういつて紅茶をすすする。

「だからどういう意味よ。まどろっこしいのよ。言いたいことが意味不明すぎてわからないわ」

「簡単さ。認めてしまえばいいのだよ。何がとは言わないよ。これでも敵と名乗ってるんだ。ヒーローの敵だからね。君は私の力だと勘違いしているようだが本当にそうかな？ 君はこの先を見たくないからこの時間をループしているだけじゃないのかい？」

「なにがしたいの！？」

「簡単な話さ。僕が今から君が自分自身にかけた呪いを解いてあげようというんだ。僕もさすがに三十回もループなどして飽き飽きしていたところだからね」

「何を意味不明なこといつてるの？ あなたのせいでしょ？ あなたのせいでこんな事になったんでしょ！？ 動け！ 今すぐぶつ殺してやる。あんたが責任転換するのは自由だけだね。自分の責任ぐらい自分でとれよ糞野郎が！！ あんたは敵で私はヒーローなのよ！？ あんたを倒せばこんなループ終わるの。それでおしまい。私がこの先を見たくない？ ちゃんちゃらおかしいわね。私すら感じだ事のない明日をどうやってあんたは見てきた訳！？ オオカミ男も対外にしなさいよ！ 認める！？ 何がよ！？ 私は……私は……

……」

「君はね多分。何もおかしくはないんだよ。ただそうだね。シヨックがでかかったんだろうね。だからヒーローの権限でこんな世界を作ってしまったのだからね。君は案外といやがってはいたけれど、この関係が好きだったんだね」

老人は時計を見上げて二人に目をやる。

「さあ。もう終わり。いい子は帰る時間だ。……………泣かないでくれるかい？」

その日からループが終わった。

そして神林 霧恵が死んだ。

5

次の日神林 霧恵の遺体が発見された。

いじめの過剰暴力によるものだった。

顔面は膨れあがり、綺麗だった髪はばらばらに切られ、それでも

なお、私の名前を呼んで死んだと警察に聞かされた。

遺留品は昨日買ったおそろいのぬいぐるみだった。携帯は逆におられていて私のアドレスすら見ることが出来なくなっていた。

どこにもあるいじめだと思った。

どこにもあるほんの些細な事件だと思った。

次のループになればかえって来ると思っていた。

だけど、ループはもう消えた事に気がついた。

昨日死ねば助かった人間が次の日にはあっけなく死んだ。

腹の黒い子が死んだ。意外と学校とは違う人間でびっくりした。

性格が変わりすぎてびっくりした。私の事が好きだと惜しげもなく語る姿にびっくりした。

でも、なんでそんなになつくのだと思っていた。確かに虐めを助けたのはわたしだけでも、それでも安っぽい友情を感じられても内

心としては困っていた。

扱いにも困っていたし、男子には受けは良かったけども、女子には不人気でよくいじめられていた。

だからあまり好きでは無かった。

そうあまり好きでは無かった。

あまり好きじゃ無かったのだ。

がこっ。がこっこっ!!!。

だから今この現状でも私はこれほどまでに冷静に対処できるのだ。

「ゆ。るじでくだ・・ざ、い」

何を言っているのだろう？ この人間は？ 誰がこの世界をまもってやっているのかわかっているのだろうか？

世界とはいわないまでも誰がこの空間を、この街を、この学校を、人を、手の届く範囲で助けてやっているのかわかっているのだろうか？

そうじゃなきゃこいつは敵だ。なんの敵だ？ いや関係ない。敵だ。敵なのだ。敵以外に何があるというのだ。

ガゴツ。ぶちぶち。げちや。

敵は私の敵だ。私はヒーローだ。霧恵は死んだのだ。

悲しい？ 悲しい。いや悲しくない。泣いてはいないのだから悲しくは無いはずだ。

ならば私はどうしてこっも拳をふるっているのだろう。

「お、べ、ゆ・・るし。でえ」

敵だからだ。敵だからに決まっている。

アンサーだ。答えだ。これが証明だ。こいつは敵でどうしようもないほどの敵でそれで霧恵は死んで。

次は誰を殺すつもりだ？ ああ。そうか。また霧恵を殺すのか。そうなんだな。おまえらが快樂や遊びでやっている事が霧恵を殺す事になるのだな。

ならば私はその前におまえらを殺してやる。それがヒーローなんだそれがヒーローたるゆえんなんだ。

「もうやめえな。死んでまう」

識髪が教室のドアの前で白衣に手を突っ込みながら私を制止させる。

教室は先ほどとかわらず血の海だった。

誰の血なのかは知ってる。霧恵をいじめた三人組の女だ。

私たちがお弁当を食べるときに陰口していた女だ。

そいつらの血だ。

「だれが、止めてくれって頼んだ？」

「私やがな。あんたいい加減にせなライセンス剥奪されるで」

「いいじゃない剥奪されても。いやループしてるからこそ殺すんでしょ？ 明日になれば霧恵も彩葉もいるんでしょ？ そうでしょ？

そうに決まってる」

どちらにしろ剥奪されても何されても霧恵もかえってくるんだ。

誰を殺そうが誰に殺されようが関係ない。

そうだ。今日寝れば私はまた霧恵と彩葉と三人で遊べるんだ。

そうだ。あのうっとうしい日に。

だけど。識髪からかえって来た答えは薫には絶望的だった。

「ループなんておきてへんがな。霧恵は死んでそのまた明日も明後日も霧恵は死んだままやで……………」

「なんでよッ！！！！ きのうまでループしてたじゃない！？ 三十

回もループして次の日には霧恵が死ぬの!? そんな不条理あつていいわけないじゃない!? なんで? なんでこんな事が起きるの!? 携帯も買ったのよ? メールするっていったもん。何とか………何とか言えよ! 識髪ツ!!!!!!」

「霧恵は死んだ。それでおしまい。この話はここで終わり。『誰かが早く見つけければ』『少しでも誰かが優しくすれば』そんなIFはあつたかもしれない。けどそうならなかった。だからこの話はここで終わり。そこで終了。どうにもならない事でそれは変えようのない事実なんだよ」

「嘘だよそれは。嘘なんだよ。そうだよ。次の日にはね? 霧恵は生きてね? それでね? また一緒にモール行くんだよ。彩葉とね? 一緒にプリクラ撮ってクレープ食べてまたね? 遊ぶんだよ。遊ばなきゃだめなんだよ。だめなんだよ………」

「………あんたそれ以上行ったら戻れんようになるで?」
「でね? 私はそうやってまた霧恵と一緒にね? 一緒に遊ぶんだ。遊ぶんだ。あそぶんだ。あそぶんだ。アそぶんだ。遊ぶんだ。遊ぶんだよ? 遊ぶってなんだっけ? 何が何をおかしいんだろ? 私はそのもそなんでヒーローなんてやってんだろ?」

「口元があがる。あがって跳ねてくるりと世界が壊れる。
「薰!!!!!!」」

なんだ。簡単じゃないか。そうだよ。そうなんだよ。

間違っているのはこの世界だ!!!!!!!!!!!!

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
?

第三話・固定概念の敵（後書き）

つづ訳で続きます。

停滞ばかりしてすいませんorz

第四話：正義の敵

ソレが猫の死骸だと気付いたのは二分二十四秒経つてからの事だ。肉塊というには少しひしゃげているその肉、或いは“物”と呼称すればいいのかわからないそのシロモノは腹這いに倒れながら足はひしゃげて頭蓋骨から目玉が飛び出し、肉片という見るも無残な姿で倒れている。

気持ち悪い。

感想は……まあそれだけ。

まじまじと眺めてみた所でそれはやはり肉であり、猫であると言われた所で“元”という文字が付く。だからもう猫ではない。

猫であつた物。

猫であろう物。

猫だつた物だ。

歩道の脇にあるソレは腐敗と血を流しながら『今は』此処に存在するが、明日 或いは夕方には綺麗さっぱりなくなっているのだらうと思いを馳せる。

私ではない誰かがその気持ちの悪い死体を拾い上げ供養して、どこかに埋めてしまうのだろうか。

それはとても素敵な事だ。

誰とも知らない人間が、善意で或いは仕方なくでそういう事をするのは素敵な事だと思う。

口の悪い人間が見ればそれは偽善と取られる行為かも知れないが、それはそれでまた人間とは素晴らしい生き物だと私は思う。

何時間そうしていたかは知らないが、道行く人々が不遜な目で私を見てくる。

おや、私は別にそれ程おかしな事をしているつもりは無かったの

だけれど、どうやらこの私の大好きゴスロリのドレスはこの国ではどうも受け付けられないシロモノらしい。

凄く残念だと思う。

この国の人間はファッションというものは量産型みたいに個性が無い、やはりザクよりグフだろう。

どこを見たって同じような人間が溢れかえっていて、誰もが同じような価値観で誰もが馬鹿みたいに自分は変じゃないかと怯えている。

そのような人間が溢れかえったこの街で、何をどう間違っかヒーローなどという者になった奴が居る。

馬鹿な女だと思う。

そんな女が今ヤバいらしい。

だからまあ通達が来たのだけれど。

「よっ……と」

ガードレールに腰掛けていたお尻を上げて、黒い日傘を差して歩く。

道は一応分かっているつもりだけれど、まあ私は根っからの方向音痴で正直な話、この道であっているかどうかすら分からないのだけれど、まあいいか……

私が歩き出すと同時に猫の死体を片付けようと、店先から年老いたお婆さんがチリトリを持って出てくる。あれで掬ってゴミ箱行きか或いは供養して埋めてあげるのだろう。

ああなんと人間とは素晴らしい生き物か。

反吐が出そうだ。

1

今回で恐らくヒーローの権利は剥奪されるであろう、と協会の使

者はそう語る。

つまりは今現在のヒーローの称号また力とその権限を失うという事だ。

薫は今しがた落ち着いた所だった。

正確には三日三晩暴れまくった拳げ句に気が狂い世界を拒絶し、人間を拒絶し、自分を拒絶して自分という存在を保てなくなって発狂して脳が勝手にシャットアウトしたのだ。

すぐさま鎖に繋がれた薫は破壊衝動を全面に押し出して、他者を殺せないならば自殺を計り、神様を呪い、他人を憎んだ。

しかしそれでも。彼女の強靱な生命力と正義の味方という存在の為に死ぬ事すらさせてはもらえなかった。

それはもう薫という個体を飛び抜けて、獣というよりも人でない者に近い何かだった。

髪を振り乱し、瞳は血走り、神様に呪詛を呟く人間はもう人ですらなく……人間という尊厳を失ってしまった何か。

その何かは今、猿ぐつわを噛まされて、黒いアイマスクを付け、固定された鉄の椅子に鎖で巻かれながら、囚人服を二枚着せられてキリストよりも酷い姿で眠っている。

それでも薫は足掻くことを辞める事は無いだろうと、そう思った。薫という少女は『いち抜けた』が苦手なのだ。それこそ隠れんぼの鬼のような少女。

因果から抜け出せない矛盾のような螺旋。メビウスの輪の囚人。

彼女がもし今、正義の味方という鎖を外す事に成功したとしても、彼女の体には何重にも糸が絡まっていて身動き一つとれない状態なのに彼女はそれをひっくるめて首に掛かる糸をもともしないで彼女は歩くのだろう。薫はそういう女だ。

キセルを口から離すと火種はいつの間にか消えていて、何のために自分は煙草を吸っていたのかすら判らなくなった。ついでに正義の在り方という意味も判らなくなっていた。

今まで以上にいや、今までの事を含めても薫という少女に正義と

いう看板は重すぎるのだ。

絶対悪など居ないこの世界に絶対正義などには必要ないのにも関わらず、彼女は正義を守ろうとする。正義であろうとする。

だけど、守る存在が悪じゃないと誰が決めたのだろう。

その守ってる人間こそが悪なのかもしれないのに、それでは正義のあり方が変わってしまう。正義ではない。

正義がもし間違っているとするならば……それは酷く無粋な質問だが間違いではない。

正義という根本的な物がないこの世界で。正義という概念は正義であろうとする行為はどこか矛盾していて悪と正義の分け目がない世界ではいったい何を置いて正義とさすのか分からないのだ。

今回の事に関しても薫が人を殺そうとしたのに守るべき者を殺せない矛盾で行き着いた先は世界を恨む事に辿り着くのが関の山だった。守るべき筈のものの裏切り。苛立ち。でもそれを全て解消した所で後に残るのは後悔と虚無感ばかりだ。

矛盾が人を殺す。

それはどこにでもある現実と自分の認識できる世界との齟齬。それが擦り切る事は無いだろうし、擦り切れる事も無いだろう。

納得するか、負けを認めるかしかないのだ。だけど薫はどちらも認めない。

その矛盾を認めてしまえば正義ですら悪になってしまうから。白だと思いこんでいた場所は裏を返せば黒だと気付いてしまうから。

悪意と正義。

どちらも分け隔てなく自分の何かを守る人間の呼称だ。

少しだけ世界に被害が及ぶか及ばないかの話。それを守られる側が悪か正義だと決めつけるだけで正義と悪は対立する二つの関係でどちらにも転び、どちらにも信念がある。それを決めるのは守られている人間でそれを倒すのが正義か悪かも分からない人間。

それを道化といわずしてなんと云うのだろう。正義の味方とは道化である。笑う者の居ない世界で必死で自分の居場所を守ろうとする道化師といっしょだ。

ガリツと音がした。それは自分の口から出た音だと気づいた時には遅かった。いつの間にか煙管を強くかんだ為に歯が欠けてしまったらしい。

「おやおや。なり損ないがどうしてまた学校の教師など？」

センスの悪い服を着た女がそういう。

それはセンスの悪い服だったが、それでも彼女が着るとそれはお人形みたいな格好にも見える。

黒と赤のセンスの悪いゴシックドレスを着た女は、白と黒のストライプ柄のニーソックスを振り上げて私の腹を蹴り倒す。

いきなりの事で受け身も何もとれなかった。不意に蹴られたお腹は綺麗に鳩尾に入っていて、息が出来なくなる。

「ごぼっ！ごぼっ！！」

「此処わかりずらいのよ。あんたもあんたなら道案内ぐらいしたらどう？ 外で待ってるとか。どうして地下なのよ。間違つて上の駄菓子屋で30円のお菓子かつちやつたじゃない！」

ローファアの靴が腹にめり込む。どうやら逃がす気もないらしい。そもそもコイツがこんな所まで来るなんて聞いてない。

「貴様が、方、向音痴や、からや、ろうが……」

「こんな建物の地下にこんな物作るから悪いんでしょ？ なんで駄菓子屋なのよ！ 本部も馬鹿じゃないの？ なんの副収入よ！ そもそも株式会社HEROってバレバレじゃないのよ！ 何が悲しくてこんな場所で地下牢とかつくつてんのよ！」

ツインテールの黒服ゴシックは私に八つ当たりしながら。顔を真っ赤にして怒っている。

「だけどコイツが来るとは聞いていなかった。なぜコイツなのだろう。そもそも来るんならば治療が先ではないのだろうか？ 何故にコイツが？」

「あれえ？ 良いわね。いいわねえその顔。助かる見込みがあったとか希望的観測を打ち崩された顔だわ。いいわねえゾクゾクする。そんなに私が来るのが不思議？ 私は薫の為だったら何処だって飛んでくるわよ。あんな危うい子が正義の味方とかやってるのよ？ たのしみじゃない。どんな人間になるのかとかどんな敵になるのかとか。まあそもそも私あの子嫌いだけどね。反吐が出る」

「本部もえらい奴よこしたもんやの。アホちゃうか。なんでカタストロフィ（最強）とかよこすんや……」

「いいわね。最強って名称。最も強い者って書くのよ。てことは私は最も強くて最も正義に近い何かって事よね。いいわねえそれ。反吐が出そう」

にっこりと笑う最強は紛うことなく、疑う余地もなく、最強という地位を持つて正義が何であるかを知っている。それが最強が最強たる所以。最強であるこの糞ゴシツクは名前も戸籍も持つていないが協会本部が初めて、彼女を戦場に送り出した時に彼女は敵味方問わず惨殺にしたことから彼女にこの名称を与えた。

カタストロフィ（最強）。初陣で上位の敵味方共々殺し尽くした人間。

「世界に絶望したんだってね彼女。馬鹿だよねえ。手の届く範囲だけ守ろうなんて、守るのは世界じゃなくて自分だけでいいのに、何を思ったか世界を救おうだなんて……反吐が出る。ああ気持ち悪い。気味が悪い。善人ぶるだけじゃ飽きたらず。世界を守ろうとするその気概もその精神も誰一人おかしいと思わないその精神も気持ち悪い。あれは欺瞞？ それとも自己満足？ 自己陶醉？」

ガツツガツツと私の腹を蹴りながら彼女は自分の言葉に笑みを漏らして笑う。

「ほんと……反吐が出る」

飽きたのが最強は蹴るのをやめて。黒い壁に持たれた。

「それで？ 私がなんの為に呼ばれたのかしってる？ なんとまー本部から直々に朝比奈薫の抹消依頼よ。わーすごいわあ私ってばす

「ごーいパチパチ」

棒読みでそういうカタストロフィは心底おもしろくなさそうに。世界に文句の一つでも言い足そうにしながらも。扉の奥にいるであろう薫を見ている。

「なんでこんな事私がしなきゃなんないのかしら？　こんなへんぴな場所まで来て同族殺しとは……反吐が出そう。たかが世界で下から二番目の馬鹿を相手にしなくちゃならないなんて」

つぶやくカタストロフィは心底めんどくさそうに愚痴を零す。

「じゃあ帰ればええやないか。あんたなんか誰もよんでへんがな」

呼吸が調った所で嫌み混じりに返答を返すが、カタストロフィは何も言わずに目の前の黒い扉を見ている。

「なり損ないあのね一つだけ良いことを教えてあげるわ」

「なんや？」

「ヒーローはなぜヒーローって言うか知ってる？」

「正義」の『味方やからやるうに」

「違うわよ。正義」の『味方だからヒーローではなくて、モチロン悪の味方だからヒーローなんかじゃなくて……」

息を呑む。ゆったりとした動作でカタストロフィは壁から背中を離して胸を反らす。

「自分を救わないからヒーローなのよ」

バンツ！　と扉が重力を無視して吹き飛んだ。

それは多分、元人である。

いや正確に言うならばそれは朝比奈薫という人間であつた筈だ。

だが、アレはなんだろう？　アレは………

「初めましてというべきかしら？　それともこんにちわ？　いやおはようかもしれないわね。私はカタストロフィ。最強の名を持つ女です。さて始めましょう。貴方のお名前は？」

「……………」

「そう。生まれたばかりだものね。殻から生まれたばかりだものね。

なら僭越ながら私が名付けましょう。貴方はそつね。こんなのはどうかしら？」

『正義の敵』

2

無限という空間はどんな場所だったかと私は思い出していた。

あいにくだがそんな場所には行ったことは無いがそれでも誰もが無限という真理から生まれてきたのは間違いではないのだ。

どうやら私は、敵になってしまったらしい。

どこから記憶が途切れているのかは分からないが、世界が私を裏切った感覚は思い出した。

どうにも私は神様とか仏様という万能な人間に嫌われる傾向があるみたいだ。

何処を何処を思い出しても私には悪い事とかした覚えなんかないのにも関わらず、神様は不平等に私に不幸を与える。

なんとという皮肉屋だろう。多分前世とかで私は神様殺しとかして

たに違いない。うん。いいぞ前世の私。もつと神様を木端微塵にするのだ。

うわ！ 神様強ッ！！ 負けたわ。妄想だけでも。

「てか此処どこよ……」

見渡す限りどうも真ッ暗であるが、不思議と落ち着くのは何故だろう？

あれか昔から根暗だったとかそんなネタかッ！ いや確かに根暗だったような気がしないでもないがそれでも暗闇が落ち着くとかそんなことはなかったんだけども。

「ねえお姉ちゃん」

後ろから声を掛けられた。それは何か鳥肌が立つようなそんな声だった。

振り替えるとどうやら憎たらしい目をした餓鬼がボールペンもって立っていた。

「なに？」

露骨に嫌な顔をして返事してやる。ていつかこいつむかつく目してるなあ。

「人は死ぬと何処に行くの？」

何とも物騒な事を聞いてきた。

「知らないわよ。馬鹿じゃないのあなた。死んだらそこで終了よ。何が悲しくてボールペンで人殺してんのよ。馬鹿じゃないの貴方。そんなに知りたかったら自分で確かめてみればいいのに」

嫌みたらしくそういうと餓鬼はふふっち笑う。

「仕方ないじゃない。死ぬことはさせてくれなかったんだから……貴方も知ってるでしょ？」

「知ってるわよ。だったらサッサと消えたらどうよ」

「ふふ。お姉ちゃん嫌い」

「私もあんたが嫌いだよ。思春期特有の生死観を行動で示しやがって、子供はセブンスターでも吸って悠君が昨日捕まってさー俺は昨日コーナンで万引きしたZEとか言っ'tけばいいのよ」

「そんなにバラバラって男の子がすき？　自分が初めて助けた男の子が好き？　敵になったときはあんなにぼろぼろにされたのに？」
「うっさいなあお前も後、数年したらその気持ちを味わうんだよ。
そうだったときにお前はバラバラに甘えるなよ？　絶対だぞ？　絶対だから！」

そう言うつと憎らしい目をした餓鬼は、少しだけ成長してセーラー服を着た女が現れその肩に翠色の蛙を従えて今にも飛びかかってきそうな殺気と目をして現れた。

「何よ？」

「……何も」

「そう」

右手が少しだけ反応した。

少しだけ手を伸ばせば…センセに手が届くのだ。

それは凄く凄く暖かい事だ。

それは凄く幸せな事だ。

私を変えてくれたのがセンセだった。人間が嫌いで嫌いで仕方なかった時にセンセに出会ったのだ。

ヒーローではないけれど、私の中ではヒーローだったセンセ。

「…センセ」

イヤになる。口に出てしまった。出してしまった。

蛙であるセンセは小さく鳴いた後で昔通り、どこから出したのか分からない煙草に火をつけて吸った。

「何をやってんだお前は」

煙を顔に吹きかけられながらそう言われた。

「いや……何って……正義の味方ですけど……」

「お前さあ。正義正義っておまえ。特撮見たことある？　何とかしんジャーとかつてやつ見たことない？　あれ正義の味方な訳じゃん？　あれが敵に操られるとかはあるかしらんけど、悪に墜ちるつてお前それ駄目だろう」

小さな手を額に当てて、ああ馬鹿弟子だ。とつぶやいた。

「そもそも何でワシがこんな所までこなきやならんの？ ワシ死んでるんよ？ お前に殺されてさ。でも何でワシこんな事までこなきやならんのか誰か説明キボンヌ。何？ ザオラルとかした？ もしかして成功しちゃった？」

うあゝ相変わらずうぜえ。ほんとうぜえ。何この蛙？ 私に会いたいとか無かったわけ？ そもそも何でこいつをセンセとかって呼んでるんだらう私。

「いやでもセンセね」

「誰がセンセじゃ。貴様にセンセとか言われたくないわボケッ！」

「ドラえもん？」

「誰がタヌキか！ こつほらあつただらう。ワシの名前。こつほら確かにドラえもんに似てるけども。あつただらう」

「土左衛門？」

「何でも言えば許されるとおもってんじゃねえぞ餓鬼いい！！！」

菊衛門！ ワシ菊衛門！ 牛蛙統括十五代目菊衛門！」

ああ。確かそんな名前だったっけか。

「腐れ和尚に会えたわけ？」

「会えるか馬鹿が。こちとら悪じゃ。あいつが行くのは上。わしや下」

「最後にいいことしたのにねえ」

「いいことな訳あるかい。ただの餓鬼に殺し頼んで、そりや神様もキれるわい」

「可愛そう……むしろいい気味」

「可愛そうどこいったんじゃ！！ 建前か貴様建前か！！ ああこの馬鹿が何相変が悲しくて悪なんて来てんだ。相変わらず成長せんやつじゃの」

「うっさいなあいいじゃん別に！ もう正義の味方やめるの。私向いてないって正義とか悪とかの世界」

ホッペた膨らませてぶうーと睨んだ。

「……不細工」

「やかましいわ!」

「まあどちらでもええわ。とりあえずワシが此処に呼ばれたからには何かしら理由があるんじゃないやろう」

セーラー服の肩からびよんと飛び降りたセンチセはゆったりと寝そべり、タバコをふかす。

「いちよやってみ? 昔の自分と今の自分と……」

131

カラストロフィーという名の女は朝比奈薫という女が嫌いである。それはかつて戦ったからという理由でも、負けたからという理由でもない。

朝比奈薫という女が持つあの正義を貫こうとする行動が嫌いなのだ。

それも朝比奈薫という女はどうにもこうにも世間を舐めているふしがある、

その感情はもちろんのこと、その精神も、その行動も、その理由も朝比奈薫という女は『世間知らず』で始まり『世間知らず』で終わる。

そのものの感情はどうにもカラストロフィーは分からないのだ。いや『分かりたくない』もないのだ。

強く鍛えられた肉体は何の為にと聞くと朝比奈薫は確実に弟の為にと言っただろう。

強く握った拳を振り上げるのは誰の為にと聞くと朝比奈薫は弟の為に答えるだろう。

あのしなやかな体は全て他人の為にあるのだ。

他人を守るなんて行為を地で行ってそれを正義と思ひ込むのが好きな勘違い女である。

だからカラストロフィーは嫌いなのだ。そんなやつが正義の味方をやっているのだ。

反吐が出る。

カラストロフィーはハツと息を吐いて壁を蹴り上げて、天井を駆け回り、愛用の黒い傘を真つ逆さまに朝比奈薫に突き刺す。

地鳴り共。のち空間が響く。空間が裂ける。

だけど……………

「フシュー。フシュー」

猿ぐつわをかまされた女は手が防がれた状態で紙一重に避ける。

永遠と繰り返す反復練習と経験則で目が防がれた状態で朝比奈薫という女は避ける。

最強の攻撃を避ける最弱など聞いたことがない。

否、朝比奈薫という女はそれができて当たり前なのだ。

それがどういう事か、だから前回も負けたのだ。

それを考えないばかりに負けたのだ。それを頭に浮かばなかったからカラストロフィーは負けたのだ。

朝比奈薫は凡人である。凡人で凡人でただ平凡な絵に描いたような人間であるが彼女には一つ、努力という才能があった。

その努力をきわめて人間という殻のまま凡人の行ける場所まで到達した女だ。

そんな女が唯一突出した能力というものがある。

それが無ければ朝比奈薫というのは凡人でしかないのにそこだけその一点だけ彼女は特に鍛え上げた。

それが回避である。

回避というものを一点に鍛え上げた。もちろんそんなもの鍛えたところで勝つ事などできやしない。

だが負けもしないのだ。

それが彼女が唯一絶対にして鍛え鍛え鍛えた武器。

力は凡人。速さも凡人。防御も凡人であるが故に当たらないというものを武器とした。

あるときは視覚を無くし。ある時は聴覚を無くし、ある時は足を封じ、手を封じ、彼女は避けるという行動を徹底して。

もちろん、だから防げない攻撃には効かない。だから殻という敵には負けたと聞いた。いや自爆したの間違いだ、それでも朝比奈薫は肉弾戦を最もとするカタストロフィーには最大の天敵。

「最弱が……最強の攻撃避けるなんてね」

考えても見なかったことという嘘になるがそれでもカタストロフィーは床を蹴り上げ、傘を逆手に持ち替えて切り上げる。手首を捻り、そのまま突きおろす。

が、それでも……紙一重で朝比奈薫は避ける。

「反吐が出る」

ギリツと奥歯を噛みしめると歯が欠けた。

三十という攻防を繰り返しながらも、当てたのはせいぜい二発という数。

身体的能力ならば圧倒的に有利にもかかわらず。それでも勝てない。

「ああ。ムカツク。ああムカツク！ あんたなんなの？ 私に何か恨みでもあんの？ ねえ言ってみなさいよ！ ほら！ ほら！ 何で私の傘が当たらない訳？ チートとかやってんじゃないの？」

強く床を蹴り上げて跳躍。天井を跳ね回りながら、同時に轟音。

鉄で作られた鉄が凹み、朝比奈薫と肉薄する。

取ったと思ってもそれでも傘の先は彼女には突き刺さらず、奥の鉄に突き刺さった。

突き刺さったまま、柄を持ち鉄棒の要領で回転。蹴り上げてその場所には誰もいない。

やはり紙一重に避けたまま。カタストロフィーを見下ろしたまま、呼吸だけしている。

「……………あーあーあーもう辞め。もう辞め」

カタストロフィーは壁から傘を引き抜いて。そのまま床に座る。

敵が目の前にいながら攻撃しないという愚行を犯す。

「お。おい」

先ほどまであっけに取られていた識髪が問いかける。

「なに？」

「いいか？ そんな悠長で、敵やで？ しかもさっきから攻撃当たってないし、どないして勝つんや？」

「そんなの知らないわよ。私だってそれを考えていまこうして考えてるんだから……」

「いやでも戦闘中やないか」

「どこが？ 攻撃してこないのに戦闘中？ それは違うわよ。こいつはさっきから避けてばっかで私なんか見て無いじゃない」

先ほどから薫は直立不動のまま何もせず、追い打ちすらかけず彼女はずっと立ち止まったまま。

「彼女は正義の敵よ？ 私が正義な訳じゃないじゃない」

「……いやそれでも」

「いいのよ。ほつといても。まだココにいるって事は正義は出てきてないって事だから……」

「正義？」

「そうよ。それを生まれるのを見るのが私の役目。つつかそれが役目」

4

攻撃が当たらないという行為ほどむなし事はない。

どれだけココが広がるうが、小さかるうがそれでもココに居るのはたった二人と一匹である。

しかし。朝比奈薫の攻撃はさきほどから一度も当たっていない。

それも過去の自分に一度として当たっていない。

それは何故か？ 朝比奈薫は凡人で凡人で成長がもう中学で止まったからである。

限界を既に行き着いてしまった状態の二人では決着なんて付くはずがない。

しかも両方が両方、回避という能力を持った化け物である、そんなもの決着など付くはずが無いのだ。

それでもその人間に二発当てたカタストロフィーという人間はやはり化け物というしかないのだが。

「なあ……薫。お前はいつたい何を学んで来たんだろうなあ」
遠くで戦闘を見守る蛙が言う。

「ワシは確かにお前をヒーローなんてものに仕上げた張本人だが、それでもココまで狂えなんていつてないし。ここまで危うく居るなんて言った覚えも無い。それでも貴様はワシは後悔はしとらんよ。お前は殺されるか殺すかの二択しかないからな。でもな。それでも少し考えてしまんだわ。ああコイツはやっぱり正義なんて看板は重かったんだろうなあって思うんだわ」

相手の攻撃がくる。それをやはり紙一重に避けてカウンターの要領で右を繰り出すが、やはり避ける。

「お前が言う正義というのが悪いという訳じゃないさ。多分お前なりに考えて手の届く範囲でその場所を守ろうとしたんだろう。でもなお前が守ったものが果たしてお前と同じ方向を向いてるとは限らんのでは無いか？ お前が守るものが第一人というならばそれでいい。そういう考え方の人間を知ってるしな。ただな時々思うんだわ。ワシら正義と悪というものは守る物がどれかって理由で、敵対する状況であたかもそれが悪と正義というならばお前が守っている物は悪じゃないのか？ とか思ったりするんじゃない」

左が来た。左の蹴りが来た。それを薫はしゃがんで避ける。そのまま水平に右足を足払いするが、相手は高く跳躍した後に足をつぶそうと全力で降りてくる。

足を急いで引っ込めて、着地した瞬間頭を掴んで頭部ごと地面にたたき付ける。だけど相手はそのまま大きく振り上げた右手をたたき込んだ。

相打ち。

「そしてな思うんだ。この世界に正義や悪なんて居るのかと……」
「だまりなさいよ」

鼻血を出しながら薫は起き上がる。

同じ人間なのだ。そりゃ回避が上手いといつても掴むくらいはできる。しかしそれでも、回避ができない状態は同じなのだそりゃ攻撃だって食らう。

「……でもお前の大切な人は殺されたぞ？ イジメっていうどこでもある社会の循環の中でお前の友達に殺されたぞ？ その行動は悪だな、たぶん悪だ。でもなどこにもでもあるんだ。それはどこにもある事なんだ」

「だからって霧恵が殺される理由なんてないでしょ？ だから彼女たちは悪じゃない！！ なにいつてんの？」

「だからだよ。お前が守っていたものは悪じゃないか。悪だから正義でもないじゃないか……」

「……………ギリツ！！」

歯が鳴る。この真っ白い世界に音だけが響いた。

「薫。お前が悪いとは言わん。お前はよく頑張ったさ、でもな薫。それじゃ誰も救えないんだよ。事実、お前の友達は死んでお前は狂ってそしてココに居る」

「煩い！！」

「薫。お前は本当は分かっているんだろ？ お前は本当に分かっている筈なんだよ」

「煩い！煩い！煩い！！！！！！！！」

「この世界は悪なんだよ」

両手を両耳に持っていった動作の為に跳ね上げられた右腕には気づかなかった。

あごに右拳は当たり、頭蓋骨を揺らし、脳を揺らしながら、高く

高く跳ね上がる。

揺らされた脳は何も考えられなくて、それでも私は霧患を救えなくて、それでも私は世界を救いたくて、それでも私は正義の味方でいたくて、でもどうやら私は正義の味方ではなくて、それはどうしようもないぐらい愚かな行動であり、私が見られた物はせいぜい小さなストラップと無くした虚無感でしかなく、それがたまらなくたまらなく悲しくて……ああこのままいつそ死んでしまってもいいんじゃないかと考えて、考えてからどうやって死ぬだろうと納得して、この体は小さな体に似合わず、不死のような体だったのだと思いい、私は私はどうしていいのかすらも分からなくなつて、私は私という個体は、悪なのか正義なのかどうでも良くなつてどうでも良くなつてしまつて。

ぶつんと何かが切れた。

体のずつと奥で、頭の中で、この感覚をなんとこのだろうか？ 真つ白だ、この世界のように真つ白だ、真つ白すぎて泣きそうになる。

これは何だろうか？ この感覚を浮遊とこのだろうか？

ああ、もうどうでもいい。いや、どうでもよくなつた、ごちゃごちゃと何か考える事もめんどくさくなつた。

世界は悪だ、確かに悪だ、多分神様は悪だ、こんな世界を作つた神様など悪に決まつている。

でも世界は変えられない、ならどうする？ ならどうしようか？

ああ、分かつた。そうだよ。そうなんだよ。

私が正義になればいいんじゃないか。私の生き様を正義と名付けよう。いまから私は誰かを守る訳ではない。

手の届く範囲なんかもう疲れた、私は正義だ。私こそが正義としよう。私が正義だ、私という人間が正義だ。

私の行動が正義としよう。あの行動が悪だ正義などもう知らん。

私こそがこの世界がたとえ悪だつたとしても私が正義になつてやる！！！！！！

「……どうしたの？ トチ狂ったの？」

「あんだね！ せっかく格好良く決めたのに！ 私が馬鹿みたいじゃない！」

「馬鹿じゃん。あと最強とか行って私に負けたじゃん」

「うっさいわね！ 私はね負けても最強なの！ いやむしろ負けるから最強なのよ！」

「そういうもんなの？ ねえ識髪？」

「ん？ ああ多分」

識髪が問われて後ずさった。

いやむしろ逃げ出したかった。たぶんあれは朝比奈薫であろうと思う。

だけれども、あれは違う。違うような気がする。いや変わったというよりは突き抜けた。

人間という枠組みを超えた人間というのは気味が悪い。いやそもそも何だろうこの威圧感。

正義というのは何だ？ 正義というものは突き詰めるとあのような気持ち悪いものだったのか？

「そういえば何で最強が居るのよ……」

「ああ。忘れてた、私あなた殺しに来たのよ。それが命令なのよ」

「そんなこと言われてもなあ。私には敵対する意志とかないしなあ」

「そうね。私もあなたが生まれるのを見るのが目的だからね。あわよくば殺せたらとか思ったけども」

「んーそうねえ。まだ敵対する気はないとおもっけども、気が変わったらごめんね」

「そう。正義とはそうなのね」

「そうなんだよ」

「反吐がでそう」

「意外とそんなもんじゃない？ 正義って」

「そうね。とりあえず今日は引いとくわ。今日はね」

最強の女は素晴らしいながら傘を開いたと思うとあっという間に消

えた。

ああ、ああやって登場やら退場するから迷子になるんだなと識髪は思う。

「さてじゃあ私も行ってくるわ」

「どこに？」

「ちよつと用事」

6

ピッピッと機械音が鳴っている。

仲良く三人で眠りながら生命維持装置の音だけが鳴っている。

ああ良かったと正義は思う。

綺麗に寝顔であるが、それでも彼女たちは悪である。

これを復讐というのかは分からないがそれでも罪に問われる事のない未成年者には人を殺してもそれは簡単に出てくる。

だから正義は思う。

やはりこの世界は悪だなあと思う頭を掻きながらさも呆気なく。

生命維持装置のスイッチを切った。

正義は思う。多分私はどこか壊れたのだろうと思う。

でもそれでも……私はもう止まれないのだ。

第四話：正義の敵（後書き）

い、一年ほったらかしでした。
すいません。まあゆっくりやっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4756f/>

焼肉定食は時に弱肉強食をも凌駕する

2010年10月8日14時33分発行